

“文理融合”をめぐって

明治学院大学 教授／東京大学・北海道大学名誉教授

亀田達也

心理学は“文系”か“理系”か？——「“文理”という枠組みの設定自体がそもそも無意味だ」という考え方には全面的に賛成するものの、この区別はさまざまな現場で今なお「リアル」であり、自分の前にも繰り返し立ち現れる問題でもある。

筆者は2024年4月から、新設の明治学院大学情報数理学部に異動した。私以外の教員は、整数論、量子情報・量子計算、アルゴリズム、暗号理論、素粒子物理、統計物理、機械学習、画像認識など、全員が「ガチの数物系」である。実験社会科学・社会心理学を専門とする私は、前職（大学院人文社会系研究科）の環境では“理系”に近いと勝手に思い込んでいたが、新しい環境では唯一の“文系”として、情報倫理の授業も担当している。同時に、7月に発足した情報科学融合領域センターで学内の人文学・社会科学系の諸学部との連携を進める役割もあり、そこでは“半理系的”な立場になる。“文理”という広範なスペクトラムのなか、自分は状況に応じて立場を変える「コウモリ」だと痛感することが多い。

そうした葛藤のなか、“文理”の連携を進めるために「メタな対話」がいかに重要かを実感する。たとえば、上記センターのキックオフシンポジウム「文理はどう共創できるか？ シナジーのあり方・作り方を考える」では、長谷川眞理子（進化生物学）、栗原聡（人工知能）、唐沢かおり（社会心理学）、村田玲音（整数論）の4氏が登壇した。専門の異なる研究者の対話がうまくいくか内心危惧していたが、4氏は「メタなレベルの議論を楽しむマインド」を見事に発揮した。分野の違う人間同士で本質的な話をするためには、測定（数値化）の仕方や科学哲学の話などを含め、個別領域を超えた俯瞰的な議論が欠かせない——そのことがシンポジウムの盛り上がりからも強く実感された（当日の録画はセンターのHPに掲載されている）。もちろん学問領域の壁は“文理”の間に限られない。たとえば心理学と社会学、あるいは心理学のさまざまな個別領域の間でもさまざまな壁があるだろう。しかし、分断を減らすうえで「メタな議論を楽しむマインド」の有効性は全く変わらないと確信する。部屋のどこかに開いている窓があって風が流れているような感覚は、心理学のコミュニティにとって、とても重要なことではないだろうか。

「互いの意見が一致しないことについて意見が一致した」という英語の表現があるが、それも大事なことだと考える。いろいろなチャンネルを通じて多様な学問領域がメタなレベルで連帯できる可能性を夢想している。



かめだ・たつや

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校大学院心理学研究科修了（Ph.D.）。東洋大学社会学部講師、北海道大学大学院文学研究科助教授・教授、スタンフォード大学行動科学高等研究所（CASBS）フェロー、北海道大学社会科学実験研究センター長、東京大学大学院人文社会系研究科教授などを経て、2024年4月より明治学院大学情報数理学部教授、情報科学融合領域センター長。専門は実験社会科学・社会心理学。著書に『連帯のための実験社会科学』『モラルの起源』（ともに単著、岩波書店）、『合議の知を求めて』（単著、共立出版）など。

心理学史諸国探訪

第26回 トルコ ②

学校法人立命館・副総長／立命館大学総合心理学部教授 サトウタツヤ



ナチスドイツによる、公務員をアーリア人に限る法律は、心理学のみならず学問の世界の人的流動性を一気に高め、ドイツの凋落の一因となったはずですが、捨てる神あれば拾う神あり、ではないですが、トルコはこうした状況を自国の発展に役立てようとしたようです。

1915年にドイツからやってきたアンシュütz (Georg Anschütz) の影響力は限定的でした(前号参照)。本当の意味でトルコの心理学を打ち立てたのは、トゥンク (Mustafa Sekip Tunc:1886-1985) です。彼は高校教師の在職中に国からヨーロッパ派遣のメンバーに選ばれました。当初はフランス文学史を学ぶはずでしたが、ジャン・ジャック・ルソー研究所(仏:Institut Jean-Jacques Rousseau)を見学したことで教育学と心理学に関心を移しました。その後、ジュネーブ大学で心理学を学び、帰国後は、高等女子教員養成学校で教育学と心理学を担当することになり、次いで、オスマン帝国大学に着任し(1919)、心理学および教育学の研究と教育を行いました。



Georg Anschütz
(1886-1953)

https://1k-cdn.com/resimler/yazarlar/27823_a1e2a_1605207739.jpg

トルコ共和国の成立後(1923)首都・アンカラには教員養成のための機関(ガジ研究所;後にアンカラ大学教育学部となる)が設置され、そこでは教育心理学、発達心理学、テストと測定、といった内容が扱われました。この機関には社会的規範の研究で有名になるシェリフ (Muzafer Sherif:1906-1988) が助教として採用され、実験室を設立することになります。彼はそこで社会的規範に関する研究を始めます。彼はその後、政治的な理由によりトルコから国外(アメリカ)に逃亡を余儀なくされますが、このことについては次号で扱います。

また、1933年にドイツでヒトラーによる国家社会主義(ナチス)政権が成立すると、公務員をアーリア人に限るという法律が作られ、ユダヤ系ドイツ人は大学教員の地位に留まることができなくなりました。この時、トルコ共和国政府は職を失った彼らをトルコ人よりも高給でイスタンブール大学に招聘しました

(Russell, 2016)。心理学の分野では、イエナ大学で最初に実験心理学の教授となったピータース (Wilhelm Peters) がイエナ大学からイギリスを経由してトルコに逃れてきました。なお、トルコの政策は自国のトルコ人教員の解雇も行っており、そこまでして優秀な学者を招聘したこと的光と影について理解する必要があります。



Wilhelm Peters
(1880-1963)

<https://www.fsv.uni-jena.de/en/22664/history>

ピータースはワイマール期のドイツにおいては教育心理学、発達心理学、知能検査などについて豊富な業績を持ち、イエナ大学で最初の心理学教授となった人でしたが、イギリスにおいては不遇でした。イギリス心理学会の会員にはなったとはいえ、イギリス国内の教員ポストの少なさから、定職に就く望みは持てませんでした。精神病院の参与観察のようなプロジェクトに属しながら固定した住所を持たずにいたようです。そして最終的にはドイツで待機を命じられるような状況に陥りました。そこに届いたのがトルコのイスタンブール大学の実験心理学講座の教授職でした。そこで彼は(近代心理学のメルクマーである)実験室を備えた実験心理学研究所をイスタンブール大学に創設しただけではなく、トルコの心理学会および学術誌の立ち上げにも尽力しました。彼は82歳までの16年間、トルコで心理学の礎を築き上げました。

ピータースを支えたトルコ人の心理学者にトゥルハン (Muemtaz Turhan) がいます。彼はドイツ・フランクフルト大学のメツガーの元で実験心理学とゲシュタルト理論を学び、ついでイギリス・ケンブリッジ大学のバートレットのもとで博士号を授与されました(1944)。ピータースが引退したあとは研究所の主任を引き継ぎました。

文献 Gulerce, A. (2006) History of Psychology in Turkey as a Sign of Diverse Modernization and Global Psychologization. In A. Brock, (Ed.), *Internationalizing the History of Psychology* (pp.75-93). New York University Press. / Russell, G. (2016) *J Hist Neurosci*, 25, 320-347. <https://doi.org/10.1080/0964704X.2016.1175201>

特集

アートは人と人の間で 生まれる

アートは、なんのために、どこから生まれてくるのでしょうか。アートは、なにもない空白の地平から生まれてくる、なんの目的ももたない純粋な創造物ではありません。むしろ、人と人とがつながるところで生まれ、また、反対に、人と人とを結びつける役割をも果たしているのではないか……。そう考えて、本特集を企画しました。

本特集では、4人の研究者の方に、それぞれ、音楽やダンスによって人と人とがつながる面白さ、アートを通じた人と人とのかわりの中で新しい創発が生まれる瞬間のこと、アートの創られ方に予想外に大きく影響する文化の存在、アートが異性の興味を自分へと向ける機能を持っている可能性、以上4つの観点から論じていただきました。

アートが人と人とのつながりの中で生まれてきている様子や、アートがどのように人と人とを結びつけているのかを、本特集を通じて感じていただければうれしいです。

(森本裕子)

一緒に音楽することの心理

神戸学院大学心理学部 准教授

河瀬 諭

はじめに

音楽は想いと絆の響き合う芸術である。多くのミュージシャンが、インタビューや歌詞などを通じて、自身の孤独について吐露している。その反面、ミュージシャンが、音楽を通じた共演者との結びつきや、ファンとの一体感を述べていることは興味深い。音楽による結びつきの体験は、聴き手にとっても同様である。コンサートでの強烈な一体感や、曲への共感、現実や自身が何者であるかも忘れさせ、圧倒的な体験をもたらす。このような体験は、ノリのよい曲で飛び跳ねながら音楽を聴くときや、音楽を伴う舞踊などにもあてはまるであろう。

音楽は太古から人類とともにあった。何万年前も前から楽器が存在し、歌はさらに昔から歌われていただろう。音楽に合わせて踊ることもまた、古代の壁画などが示すように悠久の歴史をもつ。そして人は集団で生活する社会的な存在であり、音楽も社会とともに存在してきた。つまり、音楽への洞察は、連綿と続く人と社会のしくみを知ることにつながる。そこで本稿では、集団での音楽活動について、主に人間関係や社会的な絆の側面から概観する。

合奏の統一と人間関係

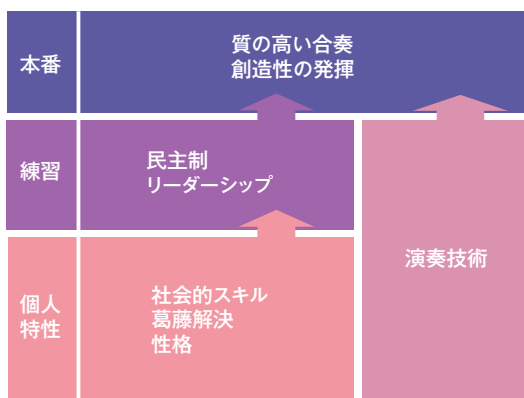
誰かと一緒に演奏する合奏は、まるで一つの社会のようである。息の合った合奏では、あたかも演奏者全員が一体となって演奏しているように見えることもあるだろう。一般的に、合奏では、互いに「合う」ことが基本となる。しかし、合奏では、ただ合っていればよい演奏になるわけではない。いわゆる「芸術的」な演奏をするためには、音のみならずさまざまな手がかり（視線や動作など）を用いた演奏者どうしのコミュニケーションが必要である。合奏で

は演奏者間の社会的関係性も色濃く反映される。ピアノデュオのフォロワーが、演奏中にリーダーを多く見ることの研究などがその証左である¹。

合奏における困難の一つは、個人の創造性と、全体の合意形成がぶつかり合う葛藤が生じることである。合奏に参加する各演奏者が、自身のパートを自分なりの解釈で演奏して録音したと仮定する。その録音された個々の演奏を同時に流しても、ばらばらの合奏になるだろう。しかし、実際の合奏では、演奏者どうしは平均して数十ミリ秒という小さなずれで演奏している。このことは、個々の演奏者は、もともとは異なる演奏解釈をもって集まったにもかかわらず、最終的には全体として統一した解釈で演奏していることを示している。したがって、合奏では、個人の芸術的創造性が、何らかのプロセスを経て集団としての創造性に収斂していくといえる。

このような個性と統一の葛藤は、コミュニケーションを通じて解決される。しかし、合奏は異なる役割をもった演奏家が集まった人間集団である。全員が一体感をもって、演奏プランを共有しながら演奏するのは一筋縄にはいかない。指揮者やリーダーが統率する場合であれ、リーダーがいない場合であれ、異なる演奏解釈はしばしば対人葛藤を生む。自身のやり方を無理に押し通そうと対立すれば、演奏が立ち行かなくなる。それゆえ、演奏者どうしの合意形成が必要になる。このような困難にうまく対処し、良好な関係を築くことが、合奏の成功において重要だといわれている。ロンドンのオーケストラの楽団員に、オーケストラでやっていくために必要なスキルを尋ねた調査では、人どうしの社会的なスキルが最も多い回答であった。2番目はチームワークや自身の役割の理解であった。驚くべきことに、卓越し

図1 合奏に関わる因子のモデル



た技術はこれらよりも言及されていなかった²。イギリスの弦楽四重奏を対象とした研究では、成功している楽団とそうでない楽団には、コミュニケーション方略やトラブルの対処法に違いがあった。成功している楽団はメンバーが尊重し合い、対立の解決法に共通点があった。また、個性と妥協の必要性が認識され、議論の基準が存在するなど、具体的なコミュニケーション方略がみられた³。

合奏の成否は、日常場面でのコミュニケーション行動とも関連していることが示唆されている。日常場面での葛藤を、win-winで対処できる能力や、他者と円滑にコミュニケーションできるかどうか、合奏の練習場面での行動に反映され、その結果、よりよい合奏ができるというモデルである⁴ (図1)。

これらの知見に照らせば、合奏の演奏者が一つのゴールに向かって阿吽の呼吸で芸術的な表現を実現するためには、演奏技術のみならず、円滑なコミュニケーションや人間関係が鍵になる。この性質ゆえに、合奏は人間社会の縮図と呼ばれるのであろう。

合奏の一体感とグループ・フロー

誰かと一緒に歌ったり演奏したりする際に、一体感を感じた経験はないだろうか。スポーツや儀礼などでの斉唱も目にする。合奏でもこうした特有の一体感が生じる。その感覚の一因として、グループ・フローや集団凝集性があるといわれている。

フロー状態とは、忘我的な熱中状態であり、ポジティブで、創造性やウェル・ビーイングにも寄与する。音楽演奏は、フロー状態をもたらす代表的な活動の一つであり、パフォーマンスの質とも関連する

といわれている。

一方で、グループ・フローは、集団的な音楽活動で生起することが指摘されているものの、実証的な研究が必ずしも豊富とはいえない。演奏家は経験的にグループ・フローを体験しているという。それは、ジャム・セッションなどの多様な音楽活動において、プロからアマチュアまで幅広く観察されている。ジャム・セッションの演奏者にインタビューした調査では、集団で感じられるフローは個人のフローと共通する性質をもつが、共演者との共感などの、グループ特有の特徴もあった⁵。

芸術におけるグループ・フローについて先駆的な指摘をしたキース・ソーヤーは、ジャズのセッションや即興劇を例に挙げている。それによれば、グループ・フローは、1人では実現できなかったであろうパフォーマンスをもたらす特別な体験である。これには、グループでの相互作用が重要であり、個人が適切に機能しながら、集団が調和して一つにまとまる⁶。ソーヤーはまた、グループ・フロー状態では、互いに何を考えているか、これから何をしようかが分かり、まるで自動的に演奏しているような感覚がもたらされると述べている。このような感覚は、互いに心を開き、耳を傾け合っている状態であり、演奏者どうしのインタラクションから生み出される。そして、集団は完全に機能しているように思われ、一体となって恍惚感に包まれる⁷。これは一種の理想的な芸術の統合状態であろう。

筆者らはこのようなグループ・フローに着目し、合唱中の一体感について、とくに時系列的な変化を検討した。セッションでは、複数の参加者が、7曲を合唱した。使用された曲は、なじみはあるものの簡単すぎない曲であった。参加者が、集団凝集性やグループ・フローについて評価したところ、合唱の前後で集団凝集性が上昇していた。また、セッション中の歌唱曲の特徴によって、グループ・フローも変化し、グループ・フローを感じられやすい曲／感じられにくい曲があった⁸。

グループ・フローは、このように状況設定や素材、時間の経過でも変化しうるものであり、生起や醸成のメカニズムがデータに基づき明らかにされることで詳らかになるであろう。今後の研究では、個人のフローとグループ・フローの相互関係なども検討す

る必要がある。

演奏者と鑑賞者、鑑賞者どうしの一体感

音楽を鑑賞している際の、生理学的な同期も一体感と関連するだろう。音楽ライブでは演奏者と鑑賞者の多様なインタラクションがおこる。例えば、オーケストラの指揮者の心拍の変化と鑑賞者の感情の強さの同調が報告されている。また、演奏者の意図（伝えたい感情や表現）は、鑑賞者に伝わる事が明らかになっている⁹。ライブコンサートなどで感じる場の一体感は、このような演奏者と観客の感情や意図の共有から生まれるものかもしれない。

音楽の鑑賞者どうしてもインタラクションは起こりえる。音楽鑑賞中には、心拍や呼吸の同期が起ることが知られている¹⁰。音楽以外でも、演劇のライブの観客たちの心拍は同期しており、心拍の同期は、パフォーマンスに対する観客どうしの感情反応と関連していた¹¹。このような作り手と受け手、もしくは受け手どうしの感情や気分の共有も、小型デバイスなどによる自然な計測により、さらに明らかになることが期待される。

音楽や身体の動きによる社会的な絆の形成

音楽は、他者と運動同期する際に有用である。音楽のリズムは時間的な予期を形成するため、他者との同調の手がかりとして機能する。したがって、複数の人が運動を同期する際に、音楽が用いられることは妥当であろう。作業歌や儀式的舞踊などで複数の参加者が、音楽やリズムに合わせて体を動かしていることはそれを物語っている。

音楽やリズムに合わせて動く／踊ることは、人どうしの絆を育む。14か月の子どもの対象とした研究が一例である。実験では、大人に抱きかかえられた子どもと実験者が、音楽に合わせて上下運動を行った。実験者は子どもの目の前で子どもの動きに同期する／同期しない条件で上下運動した。この後、実験者が困った状況に陥った場面では、同期して運動した条件の方が、子どもはより頻繁に自発的な援助行動を行った。つまり、身体運動の同期が、他者への援助行動に結びつくのである。このような向社会性や親密感の向上は、幼児から高校生まで幅広く観察されている¹²。

他者と一緒に合わせる際に、音楽を用いることの重要性も明らかにされている。4歳の子どもの仲間と楽器を叩きながら一緒に歩く条件と、話しながら歩く条件で行った実験では、歩いた後仲間が困った状況になったときに、楽器を叩いた子どもの方が、話しながら歩いた子どもよりも、仲間に対してより共感的な行動をとった¹²。また、大学生を対象とした実験では、メトロノームに合わせてタッピングするよりも、音楽に合わせてタッピングしたときのほうが、向社会的となった。これらの結果から、日常生活と一緒に合わせる手がかりとして、メトロノームのような周期的でシンプルなリズムだけでなく、なぜ音楽が利用されるのかの理由がみてとれる。

集団での音楽活動も、向社会性や共感性に影響する。筆者らの研究では、小学1年生と4～5歳の子どもの共感性やコミュニケーション行動と、音楽のグループ・レッスンとの関係が検討された。その結果、グループ・レッスンを開始した時期が早いほど、共感性やコミュニケーション行動の得点が高かった¹³。他者と一緒に音楽することと共感性や社会性などとの関連の研究は多い。例えば、10歳の子どもの対象とした研究では、1週間に1時間、同調などの相互作用的なやり取りを含む音楽プログラムに参加した1年後に、共感性のスコアが上昇した¹²。

人間関係の出発点ともいえる親子間でも、一緒に行う音楽活動の利点としてアタッチメントや社会性の促進が報告されている。音楽活動という親子の共同作業によって、母子間で同期を含むような共同的な音楽活動が生起し、それがアタッチメントを促進すると考えられる。アタッチメントは子どもの社会的能力と関連しているといわれているため、共同的な音楽活動により社会的な絆を育む基盤の形成が促されるのかもしれない。

共時的な音楽活動による社会的な絆の形成は、進化的な面からも説明しうる。一緒に音楽することは、集団生活する霊長類の毛づくろいと同じような役割を果たしていると指摘されている。毛づくろいは個体間のコミュニケーションに寄与する。しかし、集団が大きくなると、個別で行われる毛づくろいのコストも大きくなる。そこで、共時的な発声が、毛づくろいの代替となるという説である¹⁴。

他者との絆の形成には、生理学的な基盤があるこ

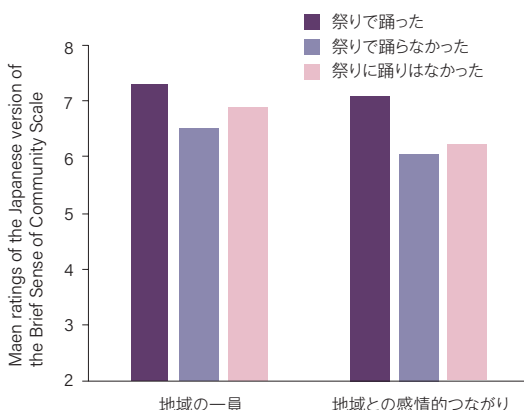
とも指摘されている。高校生と一緒にダンスする際に、エンドルフィンが放出され、他者との絆の形成に寄与している可能性が示唆されている¹²。このような同調的な対人相互作用により、神経活動の同調や社会的な絆が強化されるのかもしれない。

同期の効果には、異なる神経メカニズムが関与しているという説もある。同期の効果として、向社会行動、社会的な絆、社会的認知、ポジティブ感情の4つに大別したメタ分析によれば、集団の大きさは、向社会行動とポジティブ感情に影響するものの、社会的な絆には影響していなかった。同期による影響は、自身と他者の境界が曖昧になるかと関係していると考えられるため、集団の大きさの影響を受けるのであろう。そして、4つのカテゴリーに差異があることから、同期による心理変化には、複数のメカニズムが作用していると推測されている¹⁵。

音楽や舞踊による共同体維持の可能性

音楽に合わせて踊ることは、共同体のコミュニティの形成や維持にも貢献する。一緒にダンスをした研究では、ダンスした相手以外の人への向社会性も若干向上していた¹²。地域の祭りにおいて、一緒に踊った参加者は、踊らなかった参加者に比べて、コミュニティ意識が高く、孤独感が低かった¹⁶ (図2)。

図2 祭りの参加者のコミュニティ意識 (文献16より作成)



初対面でも、合唱により素早く親密感を形成するなど、音楽は多人数のインタラクションであっても比較的容易に打ち解ける手段になりうる。音楽やリズムを場面に応じてうまく利用することは、人が他者との紐帯を保ち、共同体の一員である自分を実感する支柱となる可能性を秘めている。

音楽による社会的な絆の実践的応用

近年の研究では、集団歌唱のセッションの利点と社会的な絆との関係が論じられている。集団歌唱に参加する参加者は、そうでない参加者よりも高いレベルの社会的な絆を感じる傾向がある¹⁷。したがって、社会的なつながりが人々のストレスを有意に減少させることを考慮すると、グループでの歌唱中に生じる他者とのつながりは、メンバー間の一体感を促進し、参加者がポジティブな気分になると推測される。

おわりに

音楽活動は、参与者どうしのきわめて社会的な相互作用であり、一緒に演奏したり歌ったり、踊ったりすることで、一体感や社会的な絆が生まれ、社会性や共感性がもたらされる。本稿でみてきたこれらの要素は、社会的な存在である人が集団で生活する上で、音楽が効果的に機能していることと表裏をなしている。したがって、音楽を探究することは、人の社会性や文化的活動の意義の理解に新たな側面から光を投げかけるものである。



かわせ・さとし

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。大阪大学大学院人間科学研究科特任助教、名古屋工業大学大学院工学研究科特任准教授などを経て、2020年より現職。専門は感性情報心理学、音楽心理学。著書に『現代の認知心理学1:知覚と感性』『音楽知覚認知ハンドブック:音楽の不思議の解明に挑む科学』(ともに分担執筆、北大路書房)など。

1 Kawase, S. (2014) *Ecol Psychol*, 26, 198–215. 2 Dobson, M. C., & Gaunt, H. F. (2015) *Psychol Music*, 43, 24–42. 3 Murnighan, K. J., & Conlon, D. E. (1991) *Adm Sci Q*, 36, 165–186. 4 Kawase, S. (2015) *Musicae Sci*, 19, 350–365. 5 Hart, E., & Di Blasi, Z. (2015) *Psychol Music*, 43, 275–290. 6 Sawyer, K. (2015) *NAMTA Journal*, 40, 29–52. 7 Sawyer, K. (2014) Group creativity: Musical performance and collaboration. In R. Caines & A. Heblein (Eds.), *The improvisation studies reader* (pp.87–100). Routledge. 8 Akagi, F. et al. (2022) *PsyArXiv*. 9 河瀬諭 (2015) 認知科学, 22, 638–648. 10 Tschacher, W. et al. (2023) *Psychol Aesthet Creat Arts*, 17, 152–162. 11 Ardizzi, M. et al. (2020) *Sci Rep*, 10, 3813. 12 河瀬諭 (2025) 音楽教育学, 54, 1–10. 13 Kawase, S. et al. (2018) *Front Psychol*, 9, 2244. 14 Launay, J. et al. (2016) *Ethology*, 122, 779–789. 15 Mogan, R. et al. (2017) *J Exp Soc Psychol*, 72, 13–20. 16 Kawase, S., & Eguchi, K. (2025) *Front Psychol*, 16, 1469066. 17 Clift, S. et al. (2010) *J Appl Arts Health*, 1, 19–34. *COI:本記事に関連して開示すべき利益相反はない。

アート鑑賞によって触発されるコミュニケーション

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター 准教授

石黒千晶

アートを通じてコミュニケーションする

学生時代、アメリカのコロラド州で数週間ホームステイした。ホストファーザーのデイビッドはやさしい人で、初めてのアメリカ滞在に緊張していた私をいろいろな場所に連れて行ってくれた。今でも覚えているのは美術館での鑑賞である。現代アートの展示を見ながら、デイビッドは私に尋ねた。

「君はどの作品が好き？ これを見てどう思う？」

何気ない問いかけだったが、私は戸惑った。なぜなら、当時の私は美術館では静かに作品鑑賞し、タイトルや解説をしっかりと読んで「正しく」理解し、神妙な顔をして出ていくまでが「正解」だと思っていたからである。畳み掛けのように、デイビッドは展示されている彫刻にアテレコしたりして、まるで遊ぶようにアート作品を楽しんでいた。補足しておく、デイビッドは現代音楽の作曲家として活躍しており、作品の歴史や背景も知っていたはずだ。しかし、彼はアートの歴史や文化的背景は一旦置いて、その作品から浮かび上がるイマジネーションを自由に話しながら私とアート鑑賞を楽しもうとしてくれた。少しずつ私が自分の感じたことを話し始めると、デイビッドは嬉しそうに話を聞いてくれて、彼自身の考えもたくさん話してくれた。私たちはアート作品から浮かび上がったイマジネーションをお互いに話して楽しんだ。これが、私がアートを通じた触発的なコミュニケーションの可能性に気づいた出来事だった。

触発するアート・コミュニケーション

心理学ではアートが人間のコミュニケーション手段の一つであることは古くから指摘されてきた^{1,2}。最近では、心理学や認知科学の知見を踏まえたア

ト・コミュニケーションの枠組みが提案されている³。その枠組みを踏まえると、アートの創造と鑑賞という行為によってアート・コミュニケーションが成立する。アートを作ること（アート創造）は自らの内にあるイメージやアイデア（イマジネーションの世界）を作品にすることである。そうしたアート作品を見ること（アート鑑賞）はその作家のイマジネーションの世界に触れることである。つまり、アート・コミュニケーションとは、アートを通じて創作者と鑑賞者がイマジネーションの世界をやりとりすることだと捉えることができる（図1）。

発信者と受信者がアート作品というシンボルを通じてメッセージをやりとりする点がコミュニケーション的な側面といえるわけだが、アート・コミュニケーションの面白いところは、メッセージを必ずしも正確に受け取る必要がないことである。アート・コミュニケーションでは受信者となる鑑賞者が表現者のイマジネーション世界を自由に解釈し、時にそれを自らの表現や創造に活かしていく。岡田猛はすべての人が何らかの表現者である

図1 アート・コミュニケーション（文献3をもとに作成）

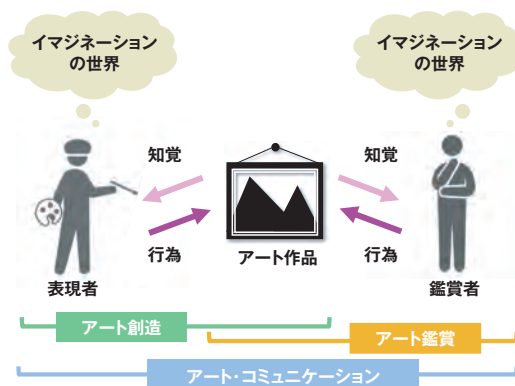


図2 触発するアート・コミュニケーション (文献4, 5をもとに作成)



という前提に立ち、鑑賞者がアートの自由な解釈から自らの表現や創造を喚起されることを触発 (inspiration) と呼び、人々の表現や創造が触発を通じてつながっていくことを「触発するアート・コミュニケーション」と呼んだ^{4, 5} (図2)。

なお、触発するアート・コミュニケーションは表現者と鑑賞者の一対一のやりとりのみには限られない。表現や作品は多様な鑑賞者の目に触れ、鑑賞者はその感想を誰かに話したりする。その感想がまた一つの表現として別の鑑賞者を触発するかもしれない。先のコロラド美術館で作品を鑑賞したとき、私はもちろん作者のイマジネーション世界についても思いを馳せたが、同じ鑑賞者であるデイビッドと作品に関するイマジネーション世界のやりとりを楽しむことができた。この経験は、私がアート鑑賞から触発を得る過程を研究し、触発するアート・コミュニケーションを体験する教育プログラムを設計・実践するきっかけの一つになった。本稿では、アート鑑賞による触発とはどのような現象なのか、子どもから大人、クリエイターからそうでない人も含めてアートによる触発がどのように起きるのかを概観しつつ、触発するアート・コミュニケーションを楽しむ実践例を紹介する。

アート鑑賞による触発

アート鑑賞による触発とはどのような体験だろうか。さまざまな芸術家他者のアート作品から触発された経験を語ってきた。パブロ・ピカソがアフリカ彫刻の影響を受けて『アヴィニヨンの娘たち』を創作し、それがキュビズム誕生のきっかけとなったことは有名な話である。フィンセント・ファン・ゴッホは日本の浮世絵を収集し、それらを模写していた。そして、そこで得た触発を『花咲

くアーモンドの木の枝』などの作品に昇華している。

現代ではインターネット上のオンラインコミュニティにおける触発も活発になっている。美術館や劇場に行かなくても、異国から作品を収集しなくても、オンラインでアート作品に気軽に触れることができる。InstagramやYouTubeなどのソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) はもちろんのこと、DeviantArt, SoundCloud, pixivなど絵画、音楽、文芸などそれぞれのアート領域に特化したオンラインコミュニティもあり、プロからアマチュアまでさまざまな人が創作物を公開し、時にはお互いにインスピレーションをもらったことを伝え合ったり、コラボレーションしたりする。

これらの例はプロにせよアマチュアにせよクリエイターだけの話だと思われるかもしれない。しかし、私たちはアートではなくても、何か物を作ったり表現したりすることを日常的に行っている。映画やテレビで美味しそうな料理が作られているのを見ると、それに触発されて自分でも作ってみたいくなる。他者の企画書やプレゼンが素晴らしかったら、そのエッセンスを自分の仕事にも取り入れてみようとする。

こうした触発という概念は10年ほど前から心理学において実証的に研究されるようになった^{6, 7}。触発は、人やアイデア、アート作品などの刺激から湧き上がる「喚起」、自分の固定観念を超えた重要な価値や可能性に気づく「超越」、そして、その価値や可能性を伝達、実現、表現しようとする「接近動機づけ」に特徴づけられる⁶。この3つの特徴は「喚起」と「超越」からなる「inspired by」と、「接近動機づけ」の「inspired to」という過程からなる⁷。アート鑑賞による触発に当てはめると、アート鑑賞によって「喚起」や「超越」を経験し、それが表現や創造の「接近動機づけ」となる過程として捉えることができる⁸。こうした定義をもとに触発に関する実証研究が行われ、明らかになってきたことがある。

(1) どんな人が触発されるのか？

先述したように、触発は天才クリエイターだけのものではない。アートを専門としない学生を対象とした研究では、触発体験の頻度や強度に関する自己報告は7段階評価で平均3~4点ほどであり、多くの人が体験したことがあることがわかってきた^{6, 9}。ただし、アートを専門としない大学生と、芸術大学の学生を比較してみたところ、芸術大学の学生のほうが触発を経験する頻

度や強度が高いことがわかった⁹。アートに限らず、科学などの領域で特許を取得した人も同様に触発を経験しやすいという報告もある⁷。誰でも多かれ少なかれ触発を経験するが、アートに限らず、何かの創造や表現に関わる人は触発を経験しやすい傾向にあるといえる。

(2) どのように触発されるのか？

さらに、アート鑑賞から触発が生まれる過程を理解するために、アートの非専門家を対象に絵画を鑑賞してもらい、その鑑賞プロセスとその後の表現の触発について尋ねる実験をした¹⁰。その結果、表現の触発にはその人のアート経験ではなく、表現に自信を持っていること、また、鑑賞中に自分の表現や創作と比較するような認知過程をたどっていることが重要であることがわかった。アート鑑賞による触発から自分も表現したいと思うのは、その人が自分自身を表現者として認めていて、アート鑑賞においても自らの表現について省察したり、鑑賞作品と自分の創作を比較したりするようなときだといえる。言い換えると、アート鑑賞による触発には、自分の頭の中で作者と自分を共存させ、表現者同士で対話を行うようなアート・コミュニケーションの過程があるのかもしれない。

(3) どのような作品に触発されるのか？

何に触発されるかも重要である。アート鑑賞による触発についての研究では、鑑賞者に触発を与えやすい作品の特徴として、①親しみのある表現スタイル¹⁰や②美的魅力があることが挙げられている¹¹。これらの特徴は作品と鑑賞者の距離に関係する。例えば、アートの専門家ではない人にとって、①の親しみのある表現スタイルは具象・写実的な表現スタイルであり、抽象的な表現スタイルには馴染みがない傾向がある。したがって、アートの専門家ではない人は慣れ親しんだ具象・写実的作品が触発を受けやすいようである。②の美的魅力は鑑賞者それぞれの「自己」と関連する。アート作品がいかに鑑賞者の個人的記憶やアイデンティティといった要素と関係するかが、アート作品の好みや美的魅力に関与し、ひいては触発体験にも関与する可能性が指摘されている¹²。アート鑑賞とは、作者が描くイメージーションの世界を理解し、解釈する過程である。一方で、鑑賞は鑑賞者自身の自己概念を基盤としているため、自己理解とも表裏一体である。そのため、かつては興味をひかなかった作品であっても、時間の経過とともに自己概念が変容して精神的に成熟したときに、深い感

動を呼び起こすことがあるのだろう。

子どもたちの触発

これまででもっぱら大人の触発の話をしてきたが、触発は子どもたちにも起きる。小学生を対象にした調査では、子どもたちもアートやものづくりに親しむ子ほど触発を体験することがわかった¹³。ただし、子どもたちのアート鑑賞による触発には大人と違うところもある。興味深いことに、子どもたちは教科書に載るような著名な絵画作品よりも、同年代の子どもが描いた絵画から触発を受けやすい。こうした違いは先ほどの鑑賞と自己概念の関係を考えると理解できそうである。子どもは自分と同じ世代の子どもが描いた作品のほうが「自己」に近く、身近である。また、子どもは大人と異なり、具象・写実的表現よりも抽象的な表現スタイルに触発されやすい。これは大人と子どもの感じるリアリティの違いが背景にあるかもしれない。子どもたちは大人が解釈に戸惑う抽象的な丸や線などの形、赤や黄色といった色などの要素に、りんごや太陽などに見立て、それらに鮮明なリアリティを感じることができる。こうした違いが触発を喚起するアート作品の違いにも反映されているのかもしれない。

触発するアート・コミュニケーションを楽しむワークショップ

触発するアート・コミュニケーションを楽しんでもらうためにはどうすればいいだろうか。アーティストやエドューケーターとともに、子どもから大人までさまざまな人を対象としたワークショップ（以下WS）を開発・実践してきた。まず目指すのは、作品からのイメージーション世界を広げることである。イメージーション世界を広げるために、私たちは鑑賞の方法を「ずらす¹⁴」。「ずらす」鑑賞とは、個人の普段の鑑賞方法の要素を変えてみることを指す。冒頭の私のように、静かに作品を見つめる鑑賞もよいが、WSではそのような鑑賞のデフォルトともいえるあり方を変えてみる。

例えば、アーティストの佐藤悠氏とのWSでは、作品の物理的な大きさを変えた。もともとA3サイズほどの絵画を3m×3mに引き伸ばして印刷し、その上を歩き回った。アートの訓練を受けていない人は絵画の中心となるモチーフや人物に目を向けがちで、背景や周辺は視界に入っているにもかかわらず注意が向かないことが多い。そ

図3 大きく印刷されたアート作品の上で行う鑑賞



うした注意の偏りを、絵画自体を物理的に大きくすることで変えてしまう。すると、参加者はモチーフ以外の絵画要素に気がつき、絵画との距離を自分で調整し始める。絵画を椅子の上から見たり、絵画の上に寝そべてみたり、踊りながら鑑賞したりと、絵画の見方を自発的に変える（図3）。それによって作品からより多様なイマジネーションを得ることができるのである。

コロナ禍に子どもから大人まで幅広い参加者に向けて実践したのは、アート・エデュケーターの夏川真里奈氏とのオンラインWSである¹⁵。このWSでは鑑賞時間を極端に短くして、目を閉じてしまう。オンラインなので画面上で作品鑑賞するが、参加者が絵画鑑賞できるのはわずか10秒間である。10秒経ったら目を閉じなければならない（チラ見してはいけない）。その後、私たちが鑑賞するのは網膜に残る絵画の記憶である。絵画の残像はすぐに明瞭さを失い、細部の記憶も消えてしまう。追い討ちをかけるように、ファシリテーターが絵画について物語を語り始める。物語によって絵画のイメージは参加者のイマジネーション世界で自由に形を変える。

最近、「ずらす」方法を鑑賞者自身が生み出せないかと考えて、新しいWSに取り組んでいる。参加者にいくつかの「ずらす」鑑賞を体験してもらい、さまざまな「ずらす」方法で作品鑑賞した参加者同士が自分のイマジネーション世界を対話する。鑑賞についての対話の仕方も学ぶ中で、一人での鑑賞だけでなく、他者とも新しい鑑賞を楽しむことを目指

している。

鑑賞のWSで、多くの人が驚くのは、鑑賞方法を少し変えるだけで、作品の見え方がガラリと変わることである。目を閉じたり、距離をとったり、誰かと話しながら「見る」ことで絵の印象が当初とは全く違うものになる。しかし、作品そのものは物理的には変わっていない。変わっているのは自分、自分と作品との関係、あるいは、一緒に鑑賞している人との関係なのかもしれない。

文化はイマジネーション世界の交流から生まれる

芸術鑑賞はすでに価値が認められた創造物を享受する行為だと考えられがちだが、あなたにとっての作品の価値はあなたが自由に創っていい。私たちは自分で鑑賞方法をデザインして、豊かなイマジネーション世界を広げることができる。今回紹介したWSの目的の一つは、そうした創造的な鑑賞過程を体感してもらうことだった。同時にアートから湧き上がったイマジネーション世界を対話する楽しさも伝えたい。アートは一人で静かに楽しむこともできるが、誰かと共有することで新しい気づきが生まれる。こうした触発するアート・コミュニケーションの積み重ねが、作品価値の協同構築となり、新たな文化的価値の創造にもつながる。

家族や友人と美術館を訪れたら、こんな一言をかけてほしい。

「あなたはどう思う？」

その瞬間、アートを通じたコミュニケーションが始まり、あなた自身も文化を創る一員になる。



いしぐろ・ちあき

2017年、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士（教育学）。玉川大学脳科学研究所嘱託研究員、金沢工業大学情報フロンティア学部心理科学科助教、聖心女子大学現代教養学部心理学科専任講師などを経て2025年より現職。専門は教育心理学・認知科学。著書に「触発するアート・コミュニケーション」（共編著、あいり出版）など。

1 アルンハイム, R. / 関計夫訳 (1987) 芸術心理学. 地湧社 2 ヴィゴツキー, L. / 柴田義松・根津真幸訳 (1971) 芸術心理学. 明治図書出版 3 岡田猛・縣拓充 (2020) 教育心理学年報, 59, 144-169. 4 岡田猛 (2013) 認知科学, 20, 10-18. 5 岡田猛 (2016) 触発するコミュニケーションとミュージアム. 中小路久美代・新藤浩伸・山本恭裕・岡田猛編, 触発するミュージアム: 文化的公共空間の新たな可能性を求めて (pp.2-10). あいり出版 6 Thrash, T. M., & Elliot, A. J. (2003) *J Pers Soc Psychol*, 84, 871-889. 7 Thrash, T. M., William, C., & Elliot, A. J. (2004) *J Pers Soc Psychol*, 87, 957-973. 8 Ishiguro, C., & Okada, T. (2020) *J Creat Behav*, 55, 489-500. 9 石黒千晶・岡田猛 (2017) 心理学研究, 88, 442-451. 10 石黒千晶・岡田猛 (2019) 心理学研究, 90, 21-31. 11 Welke, D., Purton, I., & Vessel, E. A. (2023) *Psychol Aesthet Creat Arts*, 17, 261-277. 12 Vessel, E. A., Maurer, N., Denker, A. H., & Starr, G. G. (2018) *Cognition*, 179, 121-131. 13 Ishiguro, C. (2024) *Jpn Psychol Res*, 66, 41-54. 14 石黒千晶・横地早和子・岡田猛編著 (2023) 触発するアート・コミュニケーション: 創造のための鑑賞ワークショップのデザイン. あいり出版 15 石黒千晶・夏川真里奈・岡田猛 (2022) 教育システム情報学会誌, 39, 380-385. *COI: 本記事に関連して開示すべき利益相反はない。

芸術・デザイン・文化的なところ

アルバータ大学心理学部 教授

増田貴彦

アルバータ大学心理学部大学院 博士課程1年

バイルト = オド・ツォルモン

はじめに

芸術表現は表現者の持って生まれたユニークな才能・技能の結晶であるという言説は一定の説得力をもつ。しかし芸術を生み出す表現者のところは文化から完全に独立して存在するものなのだろうか？ 芸術表現にはそれぞれの文化の世界観が色濃く反映しているのではないだろうか？ 本稿では、筆者らをはじめとした研究者が現在までに明らかにしてきたいくつかの研究から芸術表現の文化依存性について考察し、こうした研究が心理学のあらたな分野の創造のためにも重要である点を論じたい。

西洋的線遠近法と東アジア的俯瞰的画法

英国の著名な視覚心理学者、リチャード・グレゴリーは、西洋芸術で発展した線遠近法という表現形式について興味深い文化比較論を展開している¹。グレゴリーによれば、16世紀イタリア・ルネサンス期に開花した線遠近法は、三次元の光景を二次元画面上に写すことを目指したユニークな技法で、西洋文明においてこの技法は、命脈を保って現在に引き継がれているという。

線遠近法は、建築芸術家であり技術者であったフィリッポ・ブルネレスキが開発したと伝えられている（図1）。網膜上に映る三次元世界を二次元の面に写し取るということを目指す線遠近法は長い歴史をかけて開発され、その幾何学性ゆえに、正当な絵の描き方と捉えられやすく、絵のよしあしの判断をする際にも客観的な基準として用いられやすい。そして、ともすれば画家を志すものにとっては、誰でもが学ぶべき基本的技法と考えられているかもしれない。

しかしながら風景画の画法には大きな文化差がある。たとえば、有名な日本の水墨画を思い浮かべてほしい。

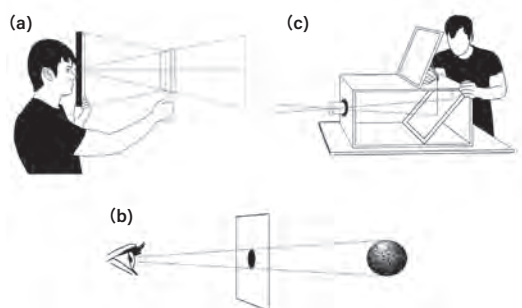
こうした東アジア文化圏の風景画においては、鑑賞者（あるいは表現者）が画像を見る立ち位置を一点に定めていないがゆえ、あたかも空を飛んでいるような俯瞰図的技法が用いられている。このことによって多面的な視点で事物に寄り添った描写ができ、また水平線・地平線を高い位置におくことで、描きたい事物を多く取り込んだ画を描くことができる。しかしこの技法を使う場合は、実際にする風景よりも画面手前と奥を押しつぶしたようなフラットかつ二次元的にした表現を受け入れなければならない。一方、西洋生まれの線遠近法を用いた技法では、鑑賞者を一点に据えて、幾何学的原理によって画面を構成することで、事物の奥行き感を確保できる（図2）。しかし水平線・地平線の位置が鑑賞者の視点より下方になるため、画面上に描かれる事物は限定的になる。また画面全体に一つの原理を適用させることで、個々の事物には、その原理に合わせた歪みが生じる（たとえば丸い池は上下につぶれた楕円になり、四角い窓はいびつな台形となる）。

文化によって異なる「世界の捉え方」

もちろん西洋的線遠近法表現と東アジア的俯瞰図的表現に優劣はない。ここで論ぜられるべきは、それぞれの文化圏において普及した芸術表現を下支えるようなところのはたらきとはどのようなものか？ そしてこころのはたらきには、その文化に通底する「世界の捉え方」が反映されているとは考えられないか？ ということである。筆者らが専門とする文化心理学——心理学・人類学・言語学・神経科学などの学際的分野では、このことに焦点をあて、過去30年にわたって実証研究を蓄積している。

視覚情報の処理に大きな文化差が見られることは、

図1 線遠近法・透視画法の変遷



ブレネレスキは自らの設計した建物の図の裏に穴を穿ち、そこから鏡に映る建物の像を見て、建築予定地にそれが建ったイメージを確認したという(a)。ダヴィンチは、三次元の像と観察者の目の間にガラス板を挟み、そこに二次元像をイメージしたという(b)。フェルメールはカメラ・オブスキュラを使って箱の上面に映る図をトレースしたという(c)。

© Takahiko Masuda and Arianna Cook, Culture and Cognition Lab, University of Alberta

文化心理学が生まれた初期からの重要なテーマである。たとえばアメリカのミシガン大学を中心にした研究グループは、北米文化圏に特徴的に見られる世界観を「分析的(アナリティック)」, 日本など東アジア文化圏に特徴的に見られる世界観を「包括的(ホーリスティック)」と呼び、それぞれの世界観の違いから、視覚情報の「見方」に無視することのできない文化差が生じていることを1990年代後半から実証的に論じている²。

「分析的世界観」を一言でまとめれば、世の中の事象はすべて要素に分割することができ、それぞれの要素のもつ特徴を論理的に理解すれば、物事の本質にたどり着けるという考え方である。この考え方に基づけば、物事の理解のためには、一つの原理に基づいて核心となる事象を見だし、明晰な判断をすることが肝要になってくる。一方、「包括的世界観」では、世の中の事象は複雑な因果の綾が関係しあっており、そもそも捉えがたいものであるが、視点をずらしながら広範囲に思いを巡らせることで、物事の本質にたどり着くことができるであろうという考え方である。たとえば「木を見て森を見ず」^{おかめはちもく}といったことわざはこうした考え方の一例である。

これらの「世界の捉え方」は、ある文化に生まれた個人が幼少期からの親・兄弟姉妹・友人とのコミュニケーションを通してその文化で重要とされる意味体系を内面化していく過程で身につくものである。たとえば、親子のおもちゃ遊びのセッションを行うと、日本の親は、乳児に対してできるだけ広い範囲に目を向けさせるような「包括的」会話をするのに対し、アメリカの親は、

図2 カナレット「サンマルコ広場から聖堂を望む図」



典型的な線遠近法に基づいて描かれている。Harvard Art Museums/Fogg Museum, Bequest of Grenville L. Winthrop © President and Fellows of Harvard College

手に取ったおもちゃに乳児が注意を向けて、どのようなものを語る「分析的」会話をする傾向があるという³。

風景画表現に見られる文化差

もし「世界の捉え方」に文化差があるのだとすれば、風景画の描き方の文化差もまた、文化特有のこころの傾向から説明ができるのではないだろうか? 西洋文化圏で生まれた線遠近法には、一つの原理に基づいて目に見える物事を描こうという意図が感じられ、そこには先に述べた「分析的」な世界観が通底しているようである。一方古来より東アジア文化圏の絵画は俯瞰図・複数視点的であり、そこには先に述べた「包括的」な世界観が通底しているようである。そこで筆者らは、まず、それぞれの文化圏で発達した視覚芸術の傾向、水平線・地平線の位置に着目し、西洋文化圏と東アジア文化圏のさまざまな美術館に所蔵されている作品のファイルにアクセスし、内容を比較分析するという研究を行った⁴。その結果、東アジア文化圏の風景画は、欧米文化圏の風景画に比べ、予想どおり水平線・地平線の位置が高く、そのせいで背景情報量を増やせる素地があることがわかった。さらに後続する研究では、西洋と日本の風景画の作品の年代ごとの変化を分析し、19世紀に日本からの文物が西洋文化圏に流入し、ジャポニズムの流行があった時期には、西洋の風景画の平均的な作品の水平線・地平線の位置は次第に上昇する傾向が見られた。またその一方で、日本の風景画は、西洋文化圏の制度・文物が流入し、西洋的な画法の教育が始まった時期には、平均的な作品の水平線・地平線の位置は次第に下降するという傾向が見られた。しかし、異文化交流の影響は概して一過的であり、たとえ

文化で長年かかって育まれた軸に一時的なドリフト（振幅）を与えたとしても、そこで生きる人々の「包括的」あるいは「分析的」なところに支えられた、一般的な描画法の中心軸は存続していくようである。

これを確かめるため、筆者らは「こうした文化特有の風景画の表現は、現代に生きる一般学生（美大生でない）の描く風景画にも反映されているのだろうか？」という問いをたてて研究を行った。この研究では、アメリカ人学生と東アジア文化圏の留学生を対象として指定した風景画を描いてもらうという単純なものだった。風景画には人・木・川・家・水平線（あるいは地平線）を入れてもらい、その他追加で好きなものも描いてもらって、短時間で完成してもらった。その結果、東アジア文化圏の留学生はアメリカ人学生に比べ、水平線・地平線を画面の高い位置に描き、時間内に指定された以外の多くの情報を描きこむことが明らかになった。これは、アメリカに渡った後も、留学生は、母国文化で一般的な風景画の描き方を維持していた結果と理解できる。

デザインの情報量に見られる文化差

絵画研究から派生的にわかったことの一つは、東アジア文化圏の留学生は、アメリカ・カナダ出身の参加者に比べ、制限時間内により多くの情報を書き込む傾向があるということである。もちろんこれは、参加者の間で課題をより完璧にこなすという動機に違いがあったという可能性も否めない。しかし画像にたくさんの事物を描きこむ動機の背景には、もしかしたら「物事は複雑である」という「包括的」な傾向があらわれているのかもしれない。もしそうだとすれば、ポスターの文字構成やレイアウトといったデザイン、ウェブデザインにおいても、中心となる情報だけを提示することに美や機能を求める「分析的」な表現と、多彩な情報を盛りだくさんに提示することに美や機能を求める「包括的」な表現の間には明らかな違いが見いだされるのではないだろうか？

以上のことを確かめるため、筆者らの別の研究では、欧米文化圏と東アジア文化圏の大学・自治体のホームページの1ページあたりの情報量、学術的研究発表のための学会発表原稿ポスターの情報量を比較した⁵。その結果、総じて東アジア文化圏のホームページやポスターは欧米文化圏のそれよりも情報量が多いことがわかった。さらに情報の多いメディ

ア（たとえば商品の画像がたくさん提示されたホームページ）をどの程度許容できるかについて、カナダの大学に所属する東アジア系の学生（日本・韓国・中国を文化出自とする学生）と欧米系の学生（ヨーロッパ・アメリカ・カナダを出自とする学生）の意見を比較して調査したところ、東アジア系の学生は、欧米系カナダ人学生と比べて、情報量が多いメディアでも、うまく処理探索できる対応力があり、さらに美的にも機能的にも情報の多いホームページを好む傾向が高いという結果が得られた。これらの結果は、ヒトは自らをとりまくその文化特有のメディアの情報量に対応して、それをうまく扱えるような行動パターンを身につけることを示唆している。

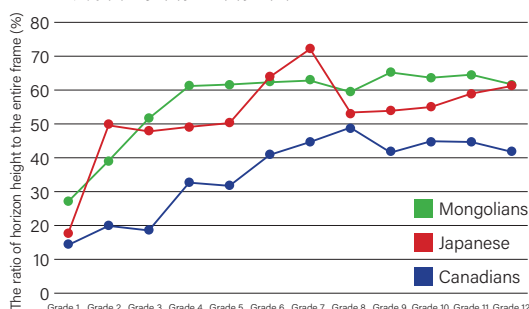
多彩な研究の構築に向けて

本稿では、ここまで筆者らの行ってきた風景画描写技法を中心に、芸術表現が心理学研究の対象となりうることを示すいくつかの例を示してきた。こうした分野のさらなる発展を構想するために、本節では、現在の心理学アカデミアで論じられている研究動向を俯瞰し、芸術・デザイン・文化的なところの研究の展望を論じたい。

心理学においてウィアードピープル（奇妙な人々）という言葉で議論が行われて久しい。この英語は、ハーバード大学のジョセフ・ヘンリックらによって提案された言葉である⁶。ヘンリックらは、欧米の心理学者は、通常大学の学部生を研究参加者として心理学データを集め、その結果だけからヒトのこころの性質の普遍性を論じることが多いと指摘する。しかし、こうした参加者は、世界の人口から見れば数%の集団でしかない。そこで、ヨーロッパ系アメリカ人であるヘンリックは、自らの属する文化集団を「西洋の（ウェスタン）」「教育を受けた（エデュケーテッド）」「先進国の（インダストリアルライズド）」「経済的余裕のある（リッチ）」「民主主義的（デモクラティック）」な文化と呼び、その英語の頭文字をとって「世界でもっとも奇妙な人たち（The WEIRD people in the world）」というスローガンを打ち立て、今後の心理学の発展のためには、広範囲の文化集団からデータを集めたうえでの議論が大切であろうと提案している。

実際、文化心理学の最近の研究では、ウィアードピープルの議論に呼応するように、中東地域・地中

図3 モンゴル・日本・カナダ人児童・生徒の風景画の水平線・地平線の位置

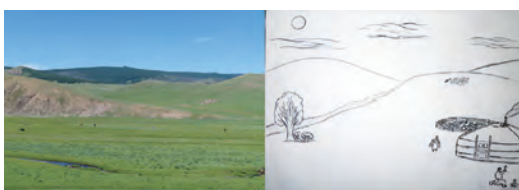


海地域・南アメリカ地域・南アジア地域など、いままですら十分に心理学データが集められていなかった地域の人々に焦点をあてた研究の重要性が論じられている⁷。筆者らも、前項であげた風景画描画研究を、東アジア文化圏と中央アジア文化圏の接点であるモンゴルにまで拡大し、ウランバートルの学校の小学生・中学生・高校生からデータを集めた⁸。この結果をカナダ・日本で集めた先行研究と比較してみると、低学年の子どもが地平線を用紙の下方に配置することは、カナダ・日本人・モンゴルの生徒共通の傾向であった。しかし、4～5年生あたりから地平線を描く位置が上がり、カナダ人よりも日本人に近い「包括的」な傾向をより強く受けた絵の描き方をしていることがわかった(図3・図4)。この研究結果はまだ基礎的なものであるが、今後のさらなる研究の指針を設定するうえで大きな意義を感じている。たとえば「もしこの結果が信頼に値するものとしたら、『包括的』な世界の捉え方やそれを反映させた美術・アート表現は、東アジア地域を超えて、どの程度、世界の多くの地域で受け入れられているのだろうか?」「相対的に見ると、分析的な絵画表現技法(線遠近法など)に日常的に親しんでいる人々は、世界人口から見れば実は少数派なのだろうか?」という問いが次の研究の俎上に載せられるだろう。

おわりに

本稿であげた風景画・デザインなどに焦点をあてた研究例は、芸術表現の文化依存性に焦点をあてた

図4 モンゴルの風景とモンゴル人の風景画の例



© Takahiko Masuda and Vernon Gaudet, Culture and Cognition Lab, University of Alberta

ほんの一例である。詳細は割愛するが、たとえば、日本人とアメリカ人に塗り絵をしてもらうと、日本人は淡い色調を使うのに対し、アメリカ人は濃い色調を使うという結果から、日本人が人間関係の調和を求める傾向とアメリカ人が独立的・積極的な自己表現を求める傾向とを対比させた研究が報告されている⁹。また動物や物体を絵にするときには二次元平面的な意匠として描くことに慣れている文化環境にいる人々は、絵に描かれた立体図形も平面的な模様として知覚する傾向があるという^{10, 11}。こうした先行研究の息吹から、心理学者は「自分は芸術に関しては門外漢である」と臆することなく、色づかい・形の表現・構図の取り方など、世界にあふれる多彩な芸術・デザイン表現の文化的差異とその歴史的変遷に目を向け、ヒトのこのこととの関係を探る研究を続けてほしいと思う。また、こうした問題について美術史家・アーティスト・デザイナーとの交流を通じた学際研究が進むのならば、それは心理学理論の一般化を希求し、従来の理論を再考するためにも重要なリソースになるであろうと期待している。



ますだ たかひこ

ミシガン大学心理学部博士課程修了。心理学博士。アルバータ大学心理学部アシスタントプロフェッサーなどを経て、2018年より現職。専門は文化心理学。著書に『ポストだけを見る欧米人みんなの顔まで見る日本人(単著、講談社)など。



Tsolmon, Bayart-Od

桜美林大学リベラルアーツ学群卒業。2019～22年、新モンゴル小中高一貫学校キャリア開発センター日本留学担当カウンセラー、2022～25年、アルバータ大学心理学部修士課程修了(修士)、2025年～同大学院博士課程1年。専門は文化心理学。

1 グレゴリー, R. L. / 近藤倫明他訳 (1998/2001) 2 Nisbett, R. E. (2003) *The geography of thought: How Asians and Westerners think differently -- and why*. Free Press. 3 Fernald, A. et al. (1993) *Child Dev*, 64, 637-656. 4 Masuda, T. et al. (2008) *Pers Soc Psychol Bull*, 34, 1260-1275. 5 Wang, H. et al. (2012) *Pers Soc Psychol Bull*, 38, 1539-1551. 6 Henrich, J. (2020) *The WEIRD people in the world: How the West became psychologically peculiar and particularly prosperous*. Farrar, Straus and Giroux. 7 Kitayama, S. et al. (2022) *Am Psychol*, 77, 991-1006. 8 Masuda, T. et al. (2020) *Front Psychol*, 11, 1394. 9 Ishii, K. et al. (2014) *Pers Soc Psychol Bull*, 40, 175-188. 10 Segall, M. H. et al. (1966) *The influence of culture on visual perception*. Bobbs-Merrill. 11 Deregowski, J. B. (1972) *Sci Am*, 227, 82-88. *COI:本記事に関連して開示すべき利益相反はない。

アートはなぜ進化したか？

—— 創造性に関する性淘汰の役割

独立行政法人日本芸術文化振興会 理事長

長谷川真理子

はじめに

アートはなぜあるのだろうか？ こんな疑問に答えるにはいくつかの道筋があるだろうが、本稿では、アートを表現したいという欲求の中に、他者へのアピール、性的魅力の発露といったものがあることについて、進化的な考察を紹介したい。

そもそもアートとは何だろう？ 広い意味では芸術であり、それは、生きること、暮らすことにかかわる生産性や実用性とは別に、ヒトが持つ美的欲求に基づいて創造され、表現されるものだ（図1・図2）。

アートの定義その他はさておき、そのような美的センスに基づく活動があることは、誰もが認めることと思う次第である。

人類進化におけるアート

人類の進化史において、アートと呼べるようなものはいつごろから見いだされるのだろうか？ これも複雑な問題であり、ここでは簡単に触れるにとどめる。

私たち自身であるホモ・サピエンスは、およそ30万年

前にアフリカで進化した。アートとおぼしきものは、その直後から見いだされているわけではない。およそ7万年前から、南アフリカなどで、石に刻んだ抽象的な模様が発見されている。が、それが芸術的なものであるのかどうかは不明だ。

誰もがアートだと感じる壁画や彫像などは、およそ4万年前から、おもにヨーロッパで見いだされる。フランスのショーベ、スペインのアルタミラ、フランスのラスコーなどに描かれた洞窟壁画はつとに有名だ。また、ドイツやフランスなどで発見されている女性の彫像は、〇〇のヴィーナスと呼ばれている¹。

しかし、これら古代のアートを作ったのがどんな人々であり、なんのつもりで作ったのか、他の人々がそれをどう感じていたのか、などについては、今となってはわからない。そこで、現代のサピエンスの諸集団において、アートがどのように表現されているか、それが性的魅力とどのように結び付いているのかについて、多くの研究がなされている。それを考える上で基礎となるのが性淘汰の理論である²。

図1 イスタンブールの聖堂のモザイクタイル（撮影、筆者）

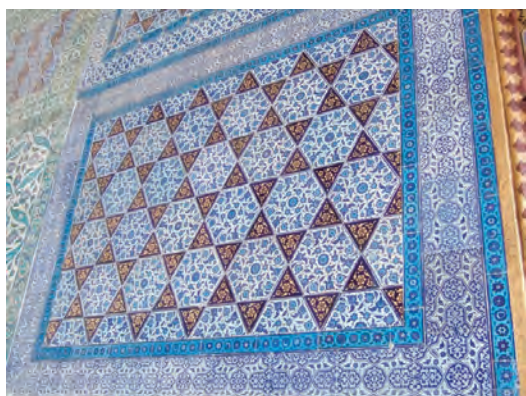


図2 カンボジア、アンコールワットのレリーフ（撮影、筆者）



性淘汰の理論

19世紀英国の博物学者であったチャールズ・ダーウィンは、進化がなぜ起こるのかのメカニズムについて、自然淘汰の理論を提出したことで有名である。それは、①生物の個体が持つさまざまな形質には、個体間で変異がある、②それらの個体変異の中には、個体の生存と繁殖に影響を与えるものがある、③それらの変異の中には遺伝するものがある、④生まれてきたすべての個体が生存して繁殖するのではなく、多くの個体は繁殖以前に死ぬ、という4つの条件が整えば、生存と繁殖に有利な形質が残る、それらが集団中に広まっていくだろう。これが、自然淘汰である。

自然淘汰の理論は、生物が環境の変化とともにどのように変わっていくのか、現在見られるさまざまな生物の形質は、なぜそのようなになっているのかを説明した。現在では、自然淘汰の基礎となる遺伝子の知識も増え、実際に人工的に進化を起こさせる実験も数多くなされている。

しかし、ダーウィンは、自然淘汰のプロセスだけで生物のさまざまな形質を説明することはできないと感じた。なぜなら、同種であっても、雄と雌の間にはいろいろな違いがあるからだ。たとえば、有蹄類の多くでは、雄のみが角を持っている。同種の雄と雌は、同じ環境に同じ時間だけさらされてきたのであるから、本来ならば同じ形質が進化するはずだろう。それにもかかわらず、このような性差があるのはなぜなのだろうか？

それを説明するために、ダーウィンが自然淘汰に続いて提出したのが、性淘汰の理論である。周囲の環境に対する適応という点では、確かに同種の雄と雌は同じ圧力にさらされてきただろう。しかし、繁殖においてはどうか？ 雄と雌では、繁殖にかかわる淘汰圧がかなり異なるのではないかとダーウィンは考えた。

多くの動物の観察から、ダーウィンは、配偶相手の獲得をめぐる、雄どうしには強い競争関係があるが、雌どうしではそうではないことに気付いた。これを同性間競争と呼ぶ。また、雄どうしが配偶相手の獲得をめぐる競争状態にあるのであれば、雌は、並み居る雄の中から、誰を配偶相手にするか選ぶことができるだろう。これを、配偶者選択と呼ぶ。一方で、雄の側には、その

ような余裕はないに違いない。

この2つのプロセスの結果、一つには、雄どうしの競争に有利な形質が、雄のみで進化すると考えられる。それが、角や牙などの武器的な形質である。また、からだの大きさが大きいほど、闘争に有利になるならば、雄の方が雌よりもからだのサイズが大きくなるだろう。

このことは多くの哺乳類その他で検証されており、角や牙が大きい個体ほど、繁殖成功率が高いことや、配偶者の獲得をめぐる競争の度合いが強い動物ほど、雄のからだは雌よりも大きいことなどが示されている。

また一方、鳥類の美しい飾り羽根や精緻なさえずり声などは、雄どうしの間の競争というよりは、雌に選ばれることで進化したと考えられる(図3)。こちらも、それを実証する研究はいくつも発表されている³。このように、性淘汰は、生物の形質を理解する上で非常に重要なプロセスであり、それがどのように働くのかは、同性、異性の個体どうしの関係のあり方によって異なる。

図3 伊豆シャボテン公園のクジャクの雄と雌(撮影、長谷川寿一)



ヒトにおける性淘汰

そこで、ヒトという哺乳類において、性淘汰がどのように働いてきたのかを考えてみよう。ヒトは哺乳類なので、雌(女性:母親)が妊娠、出産、授乳し、子育てにかけける時間的、エネルギー的コストが非常に大きい。一方の雄(男性:父親)は、授精するだけで妊娠・出産・授乳にはかかわらないので、子育てのコストは小さい。

しかし、ヒトという種は脳が非常に大きく、おとなはその大きな脳を駆使して、共同作業によって食料を得ている。そこでは、血縁、非血縁を含む多様な人々が集団を作り、非常に複雑な社会関係を営んでいる。生ま

れてきた赤ん坊を、そのようなことができるおとなになるまで育てるのは大変な作業である。それは、母親だけでは無理で、父親と母親の双方が協力するだけでも無理である。血縁・非血縁を含む多くの個体の子育てにかかわらねば、ヒトの子どもは育たない。これを、共同保育と呼ぶ。共同保育は一般的ではなく、いくつかの鳥類、哺乳類で見られるのみであるが、ヒトは、そんな共同保育の動物なのである。

そうすると、ヒトの男性は、次々と別の雌を探して授精するだけで繁殖成功度を上げることは不可能となる。特定の女性と一緒にになってその子どもを育てることに時間的、エネルギー的投資をすることが必要となるだろう。そうすると、アザラシなどに見られる極端な性差は進化しないはずだ。

実際、ヒトの身長性の性差を、さまざまなヒト集団で計算した研究によると、ヒトの身長は、雌を1とした場合に、雄は平均して1.09であり、それほど大きな性差はないことがわかった。また、ヒトの男性は角や牙を生やしてはいないし、犬歯の大きさにも性差はない。

しかし、ヒトは共同保育であるので、必ずしも雄（男性：父親）による世話が必須というわけではない。父親以外の個体からも養育の支援が十分得られるのであれば、雄は授精するだけで子育てをせずに繁殖成功度を上げることが可能だ。いわゆる「浮気」である。

そうすると、今度は、1人の雌（女性）の中で複数の雄由来の精子が混合する可能性が出てくる。そのような場合には、雄の精子製造能力が大きいほど有利になるので、精子生産の臓器である精巣が、相対的に大きくなる。ヒトの男性の精巣の大きさと精子生産能力を他の動物と比較した研究によると、ヒトの精巣は、極端ではないが、ある程度の精子間競争が存在すると思われるほどの大きさであることがわかった。

では、からだの形質ではなく、脳の働きや行動傾向に性差はあるだろうか？ これは大変に難しい問題である。なぜなら、ヒトという生物が本来そのような性差を進化で身に付けたのか、そうではなくて、ヒトの諸集団が持つ文化が、社会的学習を通してそのような性差を作り出しているのか、その区別が困難だからである。

一般に哺乳類では、雄は、同性間の競争が強いので、その競争に有利となるような形質が進化している。それは、取ってリスクをとる傾向、生存率を犠牲にしても配偶率を上げる傾向である。逆に雌は、自分自身が生

存せねば子が育たないので、リスク回避傾向が強く、生存率を上げる傾向がある。実際、ヒトを含むどの哺乳類でも、雌の方が雄よりも齢別生存率が高い。

このような雄らしさを生じさせているのは、性ホルモンの働きである。ヒトの場合も、男性的形質の発現には性ホルモン、とくにテストステロンがかかわっているので、テストステロンが大きな影響を与えている形質には、性淘汰が働いている可能性が高い。

ヒトにおける性淘汰とアート

現代の進化生物学における性淘汰の理論を用いて、アートと性淘汰の関係を詳細に論じたのは、米国の進化心理学者のジェフリー・ミラーだろう⁴。ミラーは、アートの製造にかかわるさまざまな遺伝的、性格的要因を探るとともに、アートを制作する男性が魅力的だと思われる証拠を多数集めた。近現代のアーティストの多くでは、性的関係を持つ女性の数が多く、実際に残す子どもの数も多かった。このことは、その後のいくつかの研究でも確認されているので、アートの創造力が、性淘汰によって維持または拡張されて進化してきたと考える根拠にはなる。

では、アートを創造する能力には遺伝的基盤があるのだろうか？ 自然淘汰であれ性淘汰であれ、遺伝的な変異でなければ生物進化は起こらないので、アートの能力に遺伝的基盤があることを示すのは重要なことだ。

しかし、アートの創造を直接に支配している一つまたは少数の遺伝子というものはない。アートの創造には、一般的知能（いわゆるIQ）、新奇性追求傾向、開放性など、さまざまな因子がからんでいる。そして、これらの因子にかかわる遺伝子も多数存在している。それでも、これらの形質に遺伝的基盤があることは示されており、アートの創造性には遺伝的基盤があると考えてよいだろう。

しかし、遺伝的基盤があるということは、そのような遺伝子を持っていれば必ずやアートの才能が出現することを意味するものではない。そこには、その人を取り巻く文化的、社会的環境の影響が大きく働く。ただし、そのような遺伝的基盤を持つ人がアートの創造力を発揮し、その結果として性的魅力が上がって残す子どもの数が、統計的にみて、そうではない人よりも多ければ、性淘汰による進化は生じる。その可能性はあると考え

てよいだろう⁵。

また、アートの創造力を発揮する人が、それが性的魅力であるということを自覚している必要はない。ましてや、アートの魅力を使って配偶相手の数を増やそうとしている必要もない。ミラーの著書の中には、美しい羽を生やした鳥が、「そんなつもりでこれを見せびらかしているのではない、やりたいからやっているだけだ」と、インタビューで答える挿話が出てくるが、それを行う個体の意識と、実際の効果とは別物なのである。

アートの創造力は性淘汰の、雌による配偶者選びが影響して進化してきたと結論することはできそう。しかし、このように性淘汰で考えると、アートの創造力は、雄（男性）の形質であり、雄における発現が雌におけるよりも大きいということになる。それはその通りなのだろうか？

アートをはじめとするさまざまな活動の原動力に男性ホルモンであるテストステロンがかかわっていることは、多くの研究で示されている。自然科学の業績の出版数を見ると、男性のどの研究者も、年齢が上がるとともに、その数が減少する。しかし、独身の研究者の年間業績出版数の減少カーブは、結婚した研究者のそれよりもゆるやかなのだ。そして、その数は、離婚したあと（新たな配偶者選びの段階）には再び上昇し、再婚するとまた減少に転じる⁶。このことは、さまざまな要因を差し置いても、創造性の発露とテストステロンレベルとの関係を如実に示していると言えるのではないだろうか。

ところで、先史時代のアートと呼ばれるものには、女性をかたどった彫像は多数あるが、男性をかたどったものは非常に少ない。また、洞窟壁画では、ライオンやクマ、シカなど多くの動物が描かれ、それらを狩りしている場面も多く描かれているものの、男性自身はほとんど描かれていない。これは私自身の感想だが、このことは、先史時代のアートの製作者のほとんどは男性だったことを示しているのではないだろうか？

それでも、ヒトにおける性ホルモンの働きと性淘汰の働きは、単純ではない。女性にもテストステロンは働いているし、ヒトの形質は、他の哺乳類に比べて性差が少

ないのだ。女性においても、創造性は男性と同じように存在するのだが、その表現が異なるのかもしれない。

女性における創造性は、本来、男性と同じくくらいのレベルで存在するのだが、それを自己顕示として表現しようとする欲求は、女性では少ない可能性はある。また、女性は自由に創造性を発揮することが、文化的、社会的に陰に陽に阻止されてきた可能性もおおいにある。

私は、19世紀から20世紀初期にかけて、未知の世界を探検にでかけたヨーロッパ人について調べたことがある。そのような探検を行った男性のほとんどは、20代から30代であったが、女性は40代以降であった。また、文学者の業績とその年齢との関係を調べた研究によると、女流文学者が多くの業績を出す年齢は、男性と比べて遅く、中年以降にピークを迎えていた。これらの結果をどう解釈するか？ 男性と女性で、才能を発揮する年齢が生物学的に異なるのだと言うこともできるが、ここでは文化の影響が非常に大きいのである。

未知の探検で言えば、19世紀のヨーロッパで、自分自身の財産を持って、それを好きなように使えるのは男性のみであった。女性は、夫や父親が死に、遺産を受け継いで初めて、自分の好きなことが実現できるようになる。そこで、未知の世界の探検にでかけられた女性はみな、40代以降にならざるを得なかったのだ。

そんなことを考えると、アートの能力に関する性淘汰も、分析結果をそのまま受けとるのではなく、私たちを取り巻く文化が何を人々に求め、人々のどんな行動を許容するものであるのかにも、目配りをせねばならないと気付く。

それらをふまえた上で、アートの能力には、一定程度、性的魅力の誇示という、性淘汰による進化の可能性があったことは否めないだろう。



はせがわ・まりこ

理学博士（東京大学）。国際協力事業団派遣専門家、タンザニア共和国勤務、東京大学理学部助手、米国 Yale 大学人類学部客員准教授、総合研究大学院大学教授・学長などを経て2023年より現職。専門は自然人類学、行動生態学。単著に『ヒトの原点を考える』『進化的人間考』（ともに東京大学出版会）、「私が進化生物学者になった理由」（岩波現代文庫）など多数。

1 Clottes, J. (2016) *What is paleolithic art?: Cave paintings and the dawn of human creativity*. University Chicago Press 2 Darwin, C. (1871) *The descent of man, and selection in relation to sex*. 3 Andersson, M. (1994) *Sexual selection*. Princeton University Press. 4 ミラー, G./長谷川眞理子訳 (2002) 恋人選びの心: 性淘汰と人間性の進化. 岩波書店 5 Novaes, F. C., & Natividade, J. C. (2023) *Front Psychol*, 13, <https://www.frontiersin.org/journals/psychology/articles/10.3389/fpsyg.2022.874261> 6 Kanazawa, S. (2000) *Evol Hum Behav*, 21, 317–321. *COL: 本記事に関連して開示すべき利益相反はない。

漏れる情報，漏らす心理

私たちは、日常生活のさまざまな場面で多くの情報をやりとりしています。そのなかでは、自身や他者に関する情報を意図的に漏らすことも少なくありません。なぜ情報を漏らすに至るのでしょうか。本小特集では、この問題を誰もが直面しうるテーマとして取り上げ、個人情報漏らす心理的背景に迫ります。（蔵永 瞳）

SNS 上での自己，他者に関する情報公開 ——情報を多く公開しているのは、プライバシーへの意識が低い人？

愛知学院大学総合政策学部 准教授

太幡直也

近年、社会的ネットワークをインターネット上で構築する、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（Social Networking Service: 以下SNS）が普及し、自分自身や他者に関する情報を公開することが容易になった。しかし、公開の仕方によってはトラブルにつながる可能性がある。例えば、自分自身に関する情報を多くの者の目に留まるように公開すると、見知らぬ他者から連絡を受けやすくなる¹。また、他者に関する情報をその他者が望まない形で公開することは、他者のプライバシー（自分自身に関する情報に対する他者からのアクセスの規制^{2,3}）の侵害にあたる可能性が高い⁴。

SNS上で生じる情報公開に関する問題を抑止するためには、SNS上での情報公開を規定する要因を明らかにする必要がある。本稿では、プライバシーへの意識に関する個人差に着目する。プライバシーへの意識が低いと、自分自身や他者のプライバシーを意識せずに行動しやすいと考えられる。

そこで本稿では、「SNS上で自己、他者に関する情報を多く公開しているのは、プライバシーへの意識が低い人である」という「仮説」を立て、著者らの研究を踏まえて「仮説」が正しいか否かを考察する。

「仮説」は正しい？

まず、SNS上での自己情報公開に関する研究⁵を紹介する。この研究では、2011年4月に、mixi（調査時点のログイン利用者は1500万人以上）の利用者1,051名に、ウェブ調査を実施した。自分のmixiを確認しながら、プロフィール上で設定可能な「名前」「職業」などの8種類の情報の公開範囲の設定と、プロフィールの自己紹介に自分自身に関する事柄を含めている程度（自己表出性）に回答するように求めた。また、プライバシーへの意識として、情報の種類ごとに情報プライバシー（自己情報を知られることに対する不安^{6,7}）を測定する尺度⁸にも回答するように求めた。その結果、属性

情報（「性別」などの自分の属性に関する情報）、識別情報（「本名」など、自分と他者を区別する情報）への情報プライバシーが低い人ほど、不特定他者も閲覧できる、「全体に公開」を選択している情報数が多く、自己表出性を高く評定していた。

他者情報公開についてはどうだろうか。2015年6月に、Twitter（現、X）の利用者1,654名にウェブ調査を実施した研究⁹では、自分のTwitterを確認しながら、友人、知人の、「本名」「顔がはっきりと写った写真」などの20種類の情報の公開経験を回答するように求めた。また、プライバシーへの意識として、プライバシー意識（自他のプライバシーを意識する程度）を測定する尺度¹⁰にも回答するように求めた。その結果、自己のプライバシーへの意識が低い人ほど、友人、知人に関する情報の公開経験が多かった。この理由として、自己のプライバシーへの意識が高い人が、友人、知人の情報を公開すると自分の情報を返報的に公開

されることを避けようとしたためであると推察される。一方、この研究では、他者のプライバシーへの意識は、友人、知人に関する情報を公開した経験とは直接的な関連はみられなかった。その後の研究¹¹で、他者のプライバシーへの意識が低い人ほど、SNSで他者のプライバシーが侵害されることへの懸念¹²が低く、結果的に、SNS上で友人、知人に関する情報の公開経験が多かったという結果が得られている。

以上に示した研究から、「仮説」は正しいといえる。すなわち、SNS上で自己、他者に関する情報を多く公開しているのは、プライバシーへの意識が低い人であると考えられる。

状況によっては「仮説」は正しいとは限らない？

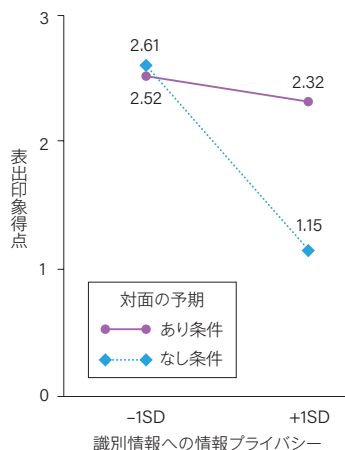
プライバシーへの意識が高くても、SNS上で自己、他者に関する情報を公開しやすくなることはないのだろうか。インターネット上では、プライバシーに不安を抱えていても、その不安に沿った行動するとは限らないという、プライバシー・パラドックスが生じることが報告されている¹³。プライバシー・パラドックスに基づくと、プライバシーへの意識が高くても、SNS上で自己、他者に関する情報を公開しやすくなる状況があると想定される。

プライバシーへの意識の個人差にかかわらず、SNS上で自己に関する情報を公開しやすくなる状況の一つに、情報を見る他者とコミュニケーションしたいという動機が高まる状況が挙げられることを示唆する研究がある¹⁴。「他大学の学生とパソコン上のチャットで会話する」という名目の実験に参

加した大学生67名に、チャット画面で相手に示す自分自身の情報を入力するように求めた。入力可能な情報は「名前」「住所」「自分の顔写真（直前にウェブカメラで撮影した）」など9種類あり、相手に示したい情報だけ入力するように求めた。また、入力する前に、半数の実験参加者には、相手とコミュニケーションしたいという動機を高めるために、「後日、相手と直接会って会話してもらう」と伝えた（対面の予期あり条件）。残りの実験参加者には、そのように伝えなかった（対面の予期なし条件）。情報を入力させた後、実験参加者に、情報プライバシーを測定する尺度⁸に回答するように求めた。その後、作成された全員分のチャット画面を2名の評定者に示し、表出印象得点（自分を表出している程度）を、「0～4（得点が高いほど表出している）」で評定してもらった。その結果、識別情報への情報プライバシーが高い人でも、対面の予期あり条件では、識別情報への情報プライバシーが低い人と同程度に、表出印象得点が高く評定された（図1）。この結果をSNS上での情報公開に援用すると、情報を見る他者とコミュニケーションしたいという動機が高まる状況では、プライバシーへの意識の個人差にかかわらず、SNS上で自己に関する情報を公開しやすくなるといえる。

以上に示した研究から、「SNS上で自己、他者に関する情報を多く公開しているのはプライバシーへの意識が低い人」という「仮説」が常に正しいわけではないといえる。プライバシーへの意識が高くても、状況次第では、SNS上で自己、他者に関する情報を

図1 条件ごとの識別情報への情報プライバシーと表出印象得点との関連



公開しやすくなる可能性があると考えられる。本稿で紹介した自己に関する情報に加え、他者に関する情報についても、プライバシーへの意識が高くても、SNS上で多く公開しやすい状況を明らかにする研究が待たれる。

おわりに

本稿では、SNS上での自己、他者に関する情報公開に着目し、情報公開に関わる要因がプライバシーへの意識の低さだけではないことを示した。今後は、SNS上での自己、他者に関する情報公開を規定する要因を網羅的に解明し、SNS上での情報公開によって生じる問題を抑止することにつなげる必要があるだろう。



たばた・なおや

筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻一貫制博士課程修了。博士（心理学）。専門は社会心理学。2015年より現職。著書に『ディスカバリー社会心理学』『「隠す」心理を科学する』（ともに共編、北大路書房）など。

1 太幡直也・佐藤広英 (2014) 人間科学:常盤大学人間科学部紀要, 32, 13-21. 2 Altman, I. (1975) *The environment and social behavior: Privacy, personal space, territory, crowding*. Brooks/Cole. 3 Westin, A. F. (1967) *Privacy and freedom*. Atheneum. 4 静岡県弁護士会 (編) (2010) 情報化時代の名誉毀損・プライバシー侵害をめぐる法律と実務 (新版). ぎょうせい 5 太幡直也・佐藤広英 (2016) パーソナリティ研究, 25, 26-34. 6 Dinev, T. et al. (2013) *Eur J Inf Syst*, 22, 295-316. 7 佐藤広英他 (2024) パーソナリティ研究, 33, 14-17. 8 佐藤広英・太幡直也 (2013) パーソナリティ研究, 21, 312-315. 9 太幡直也・佐藤広英 (2019) パーソナリティ研究, 27, 235-245. 10 太幡直也・佐藤広英 (2014) パーソナリティ研究, 23, 49-52. 11 太幡直也・佐藤広英 (2021) 心理学研究, 92, 211-216. 12 Koohikamali, M. et al. (2017) *Comput Human Behav*, 69, 29-42. 13 Taddicken, M. (2014) *J Comput Mediat Commun*, 19, 248-273. 14 太幡直也・佐藤広英 (2018) パーソナリティ研究, 27, 53-63. *COI:本記事に関連して開示すべき利益相反はない。

プライバシーの心理と情報漏洩

——高齢者のネットトラブルを例として

信州大学人文学部 准教授

佐藤広英

はじめに

近年、SNSやオンラインショッピングなどの普及により、日常生活において個人情報を発信・共有する機会が急速に増えている。それに伴い、個人が意図せず情報を漏洩してしまうケースも少なくない。情報漏洩というと企業のデータ流出などの技術的な問題が想起されがちであるが、実際には個人レベルの日常生活でも生じうる問題である。

情報漏洩が起こる背景には、単なる知識不足だけでなく、プライバシー（自己に対する他者からのアクセスの規制¹⁾）に対する意識や管理の仕方が深く関係している。例えば、どの情報を、誰に、どの範囲で公開するかは、人によっても状況によっても大きく異なる。そのため、個人のプライバシーに対する意識や管理の仕方が、情報漏洩のリスクを左右する要因となりうる。

本稿では、プライバシーの観点から情報漏洩の要因を検討し、人がなぜ意図せず情報を漏洩してしまうのかを考察する。情報漏洩のリスクはすべての年齢層に共通すると考えられるが、ここでは特に高齢者のネットトラブルを例に取り上げ、プライバシーと情報漏洩の関係について議論を進める。

情報プライバシーの個人差

プライバシーが脅かされる場面で感じる懸念や不安の程度には、個人差があるとされる。個人の情報が他

者に知られることへの不安や懸念は「情報プライバシー」と呼ばれ²⁾、この個人差に着目した研究が数多く行われている。これらの研究によると、プライバシーへの不安が低い人ほどSNS上で公開している情報の数が多く³⁾、ネットトラブルの被害を経験している人が多いこと²⁾が明らかとなっている。すなわち、プライバシーへの不安が低い人ほど、意図せず情報を漏洩してしまうリスクが高いと考えられる。

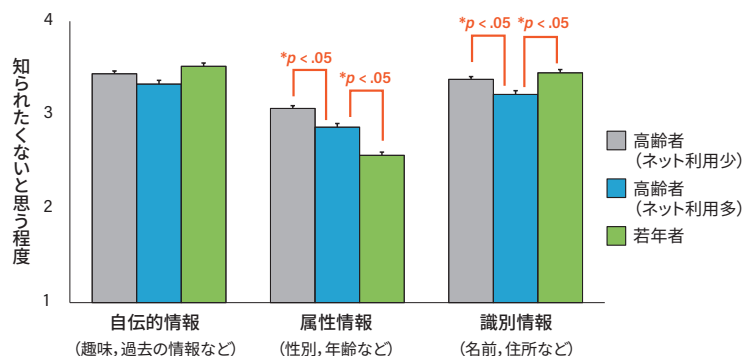
この傾向は高齢者を対象とした研究⁴⁾においても同様であり、プライバシーへの不安が低い高齢者ほど、個人情報の流出や架空請求など、さまざまなネットトラブルの被害を経験していることが示されている。また、高齢者と若年者それぞれの「識別情報（個人を特定可能な情報）」に対するプライバシーへの不安の程度を比較すると、インターネットの利用頻度が低い高齢者ではプライバシーへの不安が若年

者と同程度である一方、インターネットの利用頻度が高い高齢者ではプライバシーへの不安が低い傾向にあった（図1）。

この背景にはポジティブバイアスの影響が考えられる。ポジティブバイアスとは、加齢に伴って自分の期待に沿うポジティブな情報を重視し、期待に反するネガティブな情報を軽視する傾向をさす⁵⁾。このバイアスによってネット上のリスクを過小評価し、「自分は大丈夫だろう」と考えて利便性や人とのつながりを優先するケースが生じると考えられる。その結果、プライバシー管理が疎かになり、情報漏洩やネットトラブルのリスクが高まると考えられる。

さらに、高齢者はポジティブな体験を重視しやすいとされ⁶⁾、ネット上の利便性を求めるあまりリスクへの注意が十分に向かず、思わぬトラブルを招く可能性がある。このような傾向は、

図1 高齢者と若年者の情報プライバシーの比較（※エラーバーは標準誤差）



SNSやオンライン取引などの日常的な利用場面で顕在化し、周囲のサポートが不十分な場合にはネットトラブルの被害につながりやすいと考えられる。

プライバシーの計算

一般には、プライバシーへの不安が高い人ほど情報公開に慎重になり、プライバシーを積極的に管理して情報漏洩を防ぐと考えられる。しかし、実際には必ずしもそうではなく、プライバシーの重要性を認識しながら情報を漏洩してしまうケースもある。このような意識と行動のずれは、プライバシーのリスクと利便性のトレードオフによって説明されることが多い。すなわち、プライバシーを守りたい一方でオンラインサービスの利便性を享受しようとする欲求が勝り、結果としてリスクを軽視してしまうのである。一見するとリスクとベネフィットを比較した合理的な意思決定のようにも見えるが、実際には楽観バイアスや現在志向バイアスなどのさまざまな認知バイアスや文脈的要因の影響を強く受けることが指摘されており⁷、状況に応じて大きく変化するとされる。そのため、ある場面ではプライバシーのリスクを慎重に検討して行動する一方、別の場面では利便性を優先して情報を公開してしまうといったことが起こりうる。こうした状況依存性が、個人のプライバシーに対する意識や管理の仕方を説明する一因となっている。

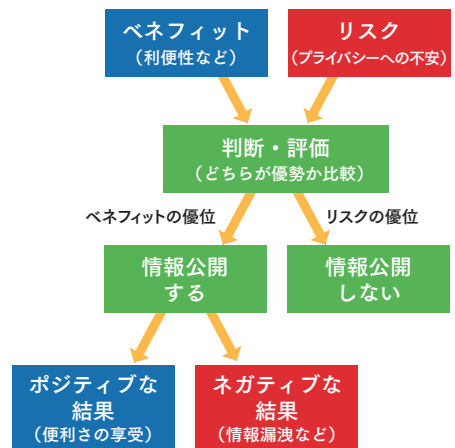
ここで有用な枠組みとして、プライバシー計算理論 (privacy calculus theory) が挙げられる⁸。プライバシー計算理論によれば、個人が情報を公開する際には、得られるベネフィットとリスクを天秤にかけ、比較衡量しながら意思決定を行うとされる (図2)。

例えば、ネットショッピングに関する研究によると、ネットに対するプライバシーへの不安は情報公開の意図を抑制する一方、ネットへの信頼 (トラスト) や利用動機 (特定の情報やサービスを利用することへの動機) は情報公開の意図を促進することが示されている。すなわち、情報を公開するか否かの判断において、プライバシーリスクよりも信頼や利用動機といったベネフィットが重視される場合がある。

しかし、リスクを正しく評価できず、ベネフィットが過大に見積もられた場合には、慎重さを欠いた情報公開が行われ、結果として個人情報の流出など意図しない情報漏洩につながる恐れがある。

このことは、高齢者のネットトラブルにおいても同様に見られる。高齢者がネット上の詐欺の手口に関する知識を十分に持たない場合、リスクを正しく見積もれず、誤った判断を下してしまう可能性が高い。さらに、高齢者は新たな技術や使い方を学ぶことに対して不安や抵抗感を感じやすい⁹ため、必要なセキュリティ対策を取れなかったり、操作・設定を誤ったりするケースも想定される。加えて、ネットリテラシー教育の機会が限られていることも高齢者が必要な知識を習得しづらい一因となっている。例えば、なりすまし詐欺の連絡を受け取った際にそれが偽物であるか否かを見分けられず、「本物の企業からの連絡」と信じ込んで個人情報を提供してしまったり、一見安全そうな取引サイトにクレジットカード情報を入力し、フィッシング詐欺

図2 プライバシー計算理論に基づく意思決定プロセス



に遭う可能性もある。このようにリスクの評価が十分になされないまま情報を提供してしまうことで、結果的に情報漏洩やネットトラブルを招いてしまうのである。

おわりに

本稿では、高齢者のネットトラブルの事例を通して、プライバシーと情報漏洩の関連について概観した。情報漏洩のリスクを軽減するためには、個人のプライバシーに対する意識を高めるだけでなく、認知バイアスや意思決定プロセスを考慮した包括的な対策が必要と考えられる。特に高齢者には具体的な被害事例を提示しながらリスクを実感してもらうとともに、家族や地域コミュニティとの連携によって適切な意思決定を支援していく仕組みが重要であろう。



さとう・ひろつね

2009年、筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学専攻博士課程修了。博士 (心理学)。専門は社会心理学。2012年より現職。著書に『スタンダード社会心理学』(分担執筆, サイエンス社) など。

1 Altman, I. (1975) *The environment and social behavior: Privacy, personal space, territory, crowding*. Brooks/Cole. 2 佐藤広英・太幡直也 (2016) メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 15-26. 3 太幡直也・佐藤広英 (2016) パーソナリティ研究, 25, 26-34. 4 佐藤広英・太幡直也 (2018) 老年社会科学, 40, 271-282. 5 Kalenzaga, S. et al. (2016) *Emotion*, 16, 602-610. 6 Carstensen, L. L. (1992) *Psychol Aging*, 7, 331-338. 7 Acquisti, A. et al. (2015) *Science*, 347, 509-514. 8 Dinev, T., & Hart, P. (2006) *Inf Syst Res*, 17, 61-80. 9 Charness, N., & Boot, W. R. (2009) *Curr Dir Psychol Sci*, 18, 253-258. *COL: 本記事に関連して開示すべき利益相反はない。

自分の裸を撮って送られる被害

——SNSなどで知り合った相手との間で

科学警察研究所犯罪行動科学部少年研究室 研究員

藤原佑貴

はじめに

相手にだまされたり脅されたりして、自分の下着姿や裸を撮影させられ、メッセージなどで送られる。これが自画撮り被害と呼ばれる、児童ポルノや性的姿態撮影等処罰法の被害だ。児童がスマートフォン（以下、スマホ）を使い被害に遭う場合が多く、被害が外から見えにくいいため、被害防止が課題である。

2017年に私たちが女子中高生を対象に行った調査では、回答の得られた5,968名のうち308名（5.4%）が裸などの写真を頼まれたと回答し、そのうち67名（21.8%）が頼まれて写真を送ったと回答した。その後自画撮り被害の被害児童数はさらに増えて、児童ポルノの被害の3分の1以上を占め¹、高止まりしている。2023年には刑法が改正され、16歳未満の児童への裸の写真などの要求が規制された。しかし近年は小学生にもスマホの利用が広まり、小学生の被害が増加傾向にある¹。

自画撮り被害の多くは、SNSなどで知り合った相手によるものである²。自分の裸を人に見せてはいけないということは多くの児童が知っているはずだが、被害は後を絶たない。では相手との間で一体何が起きているのか。本稿では、私たちが行った自画撮り被害の被害児童に対する調査結果³の一部を紹介し、自画撮り被害の防止対策について述べる。

自画撮り被害の実態

私たちは、自画撮り被害の実態を把握し、被害防止につながる知見を得るために調査を行った。児童ポルノの被害児童の9割が女子のため¹、女子を調査の対象とした。2016～17年に全国の警察で取り扱った、自画撮り被害に遭った女子児童とその担当警察職員に対して質問紙調査を行い、相手とインターネット（以下、ネット）で知り合って被害時に相手を男性と認識していた児童138名とその担当職員のデータを分析した。

その結果、相手は20代が34.6%で最も多く、20歳以上が過半数であった。相手の年代を知らなかった者も15.0%いた。ネットでの年上の相手とのやりとりの危険性は海外でも指摘されており⁴、相手が年上だと分かったら特にやりとりに慎重になるべきである。被疑者の言動では性的な話題が多く、頻繁に連絡が来た、顔写真を求められたと回答した者が大半で、4人に1人は脅すようなことを言われていた。これらは児童を狙う性犯罪者の手口として知られている^{5,6}。相手にこのような言動がみられたらやりとりを控えるよう、児童に注意を促す必要がある。

やりとりの特徴による4群の違い

被疑者と女子児童とのやりとりの特徴について、17の変数を用いて多重対応分析を行った（図1左）。この

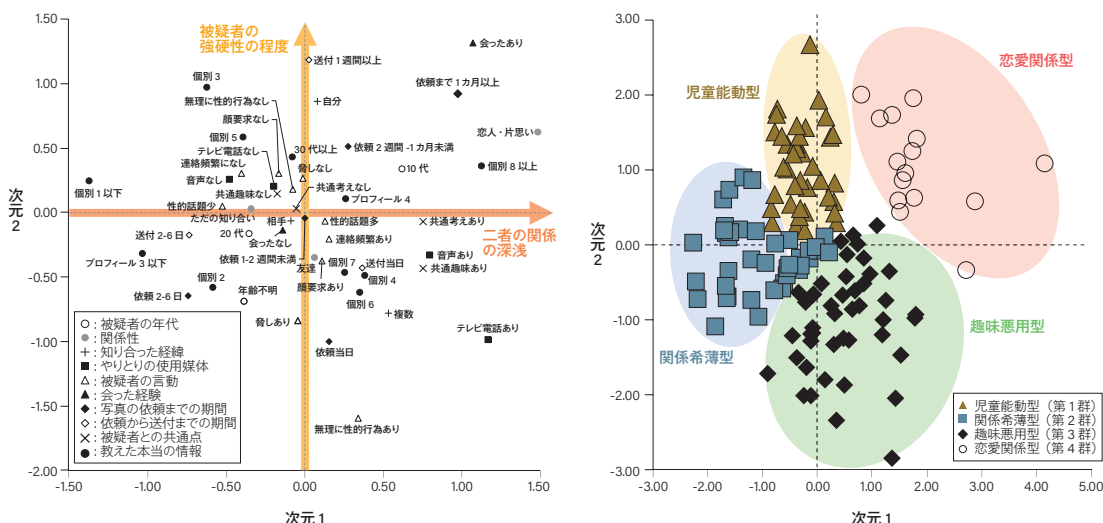
分析では、関係の強い変数同士が図の中で近くに配置される。次元1に着目すると、右のほうに「相手が恋人・片思い」といった2人の関係の深さを示す変数が、左のほうには児童が教えた情報の少なさを示す変数などが配置された。このことから次元1は2人の関係の深さの程度を示していると考えられた。次元2では、上のほうに「自分から被疑者にアクセスした」といった被疑者が強制的ではないことを示す変数が、下のほうに「無理に性的行為をさせようとした」といった被疑者が強制的であることを示す変数が配置された。このことから次元2は被疑者の強行性の程度を示していると考えられた。

この分析で算出した個人の数量化得点について階層的クラスター分析を行い、自画撮り被害の事例は4群に分けられた（図1右）。そして、群による児童の特徴の違いを検討した。

①**児童能動型**では、自分から被疑者に連絡した児童が大半であり、児童の抵抗感が低く、被疑者は強行的な手段が不要であったと考えられた。この群の3分の1の児童がネット上に被害につながり得るような書き込みをしており、この割合は4群で最も高かった。

②**関係希薄型**では、被疑者とただの知り合いであった者が多く、児童が教えた情報は少なかった。この群の児童は外見への満足感が低かった。

図1 自撮り被害のやりとりの特徴に関する全17変数による多重対応分析の結果とそれによる分類 (n = 138)



③**趣味悪用型**では、被疑者と共通の趣味のグループで知り合い、短い間に個人的な情報を教えるなかで、無理に性的な行為をさせられたり脅されたりしていた。この群では、被疑者が共通の趣味があるふりをして児童に近づき、児童からさまざまな情報を引き出して、それを利用して児童を脅した可能性がある。この群は裸の写真を送ることのリスクの認知が最も高く、脅しにより仕方なく写真を送付したと考えられた。

④**恋愛関係型**では、時間をかけて恋愛関係を築き、深い話をしたり直接会ったりしていた。この群の3分の2の児童は相手を10代と回答したが、20歳以上や年齢不詳の場合も含まれており、被疑者が児童への好意や恋愛関係を偽っていた可能性がある。

被害防止教育に向けて

大前提として、自分の体は大切で、裸は自分だけが見る特別なものであることを伝えることが、あらゆる

性被害の防止のために重要である⁷。近年性被害防止のための幼児向けの絵本も出ている。幼少期から家庭などで自分の身を守るための性教育を行うなどにより、自分が大切な存在であるという認識をもつことが、被害防止につながると考えられる。

次に、被害に遭いそうになった際の具体的な対処法を周知する必要がある。SNSなどで知り合った相手とのやりとりは一般化しており、被害防止教育は誰でも被害に遭い得ることを前提にすべきである。児童が脅しに屈して写真を送る例もあるが、それが次の脅しにつながる場合もある。事前に対処法を知らせて、児童が自分の身を守るようにしていくことが急務である。

また、趣味悪用型では知り合って間もないうちに児童が自分の情報を教えていたが、趣味が同じで気が合うと思う相手でも、自分の情報を教えることには慎重になるほうがよい。恋愛関係型では時間をかけて関係を築いた上で被害に遭っており、長い間やりと

りをしている相手なら信頼できるとも言えない。被害防止教育では、児童に不相応な相手の年齢や性的関係について伝える必要があると考えられる。

おわりに

子どもでもスマホ1つで世界中の人とつながることができる。親より子どものほうがスマホに詳しい場合もあるだろう。しかし、仮に子どもがスマホの操作に長けていても、自分の身を守りながら安全にスマホを使えるようになるためには、周りの大人の関わりが不可欠である。

今も被害に遭っている児童がいる。心理学の見解が1人でも多くの児童の助けになることを願っている。

ふじわら・ゆうき

名古屋大学大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻博士前期課程修了。

専門は犯罪心理学、発達心理学、臨床心理学。2012年より現職。著書に『犯罪心理学事典』（分担執筆、丸善出版）など。

1 警察庁生活安全局人身安全・少年課 (2024) 令和5年における少年非行及び子供の性被害の状況. https://www.npa.go.jp/bureau/safetylife/syonen/pdf/r5_syonenhikoujuyokyo_kakutei.pdf 2 警察庁 (2019) STOP! ネット犯罪: 知ってますか? ネットにまつわる犯罪. https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/news_2019_stop_cyber_crime.pdf 3 藤原佑貴他 (2023) 心理学研究, 94, 289-299. 4 Finkelhor, D. W. et al. (2021) *Trauma Violence Abuse*, 22, 1233-1247. 5 O'Connell, R. (2003) *A typology of child cybersexexploitation and online grooming practices*. Cyberspace Research Unit, University of Central Lancashire. 6 Whittle, H. C. et al. (2014) *Soc Sci*, 3, 404-426. 7 遠見才希子 (2021) だいいじいじーコード?: はじめての「からだ」と「性」のえほん. 大泉書店 *COI: 本稿に関連して開示すべき利益相反はない。

カミングアウトの覚悟と勇気

宝塚大学看護学部 教授

日高庸晴

はじめに

恋愛や性愛の対象が異性である人が世の中の大半ではありますが、その対象が同性であったり両性であったり、あるいは同性にも異性にも恋愛感情を抱かない人も存在します。また、身体の性別に違和感があり出生時の性別とは異なる性別で生きたいと望む人も存在し、服装や髪形、ホルモン療法や性別適合手術など、どの程度の性別移行を望むかには個人差があります。これらのように、性的指向やジェンダーアイデンティティのありようはまさに多様です。『心理学ワールド』読者の中にも、いわゆる「多数」とは異なるありかたの人が、自分の友人にいる、兄弟姉妹に、わが子にあてはまる、あるいは自分自身のことであると思いながら本稿を読み進めている人もいることと思います。

カミングアウトの難しさ

メンタルヘルス

2015年11月に東京都世田谷区と渋谷区で同性パートナーシップ制度が導入され、現在では全国で500近い自治体が類似の取り組みを実施しておりその数は年々拡大、性的指向やジェンダーアイデンティティの多様性が認識され、尊重されつつあります。しかしながら世の中の取り組みが進む一方で、自らのありようについて他者にカミングアウトすることは、今なおハードルが高く困難なことでしょう。

筆者は1998年からLGBTQ+¹を対象にした調査研究を継続実施してお

り今年で27年目になります。国内初のゲイ・バイセクシュアル男性を対象にした大規模な横断研究は1999年の夏にさかのぼり、本節ではそのデータをご報告します（有効回答数1,025人）。当該集団のメンタルヘルスの現状について、とりわけカミングアウトしていない状況下における精神的健康はどのような状態であるのか、心理尺度を用いながら明確化することを試みたことがあります。男性は女性を、女性は男性を恋愛対象とする異性愛を自明とする社会、あるいは同性愛をステイグマ化する社会においてカミングアウトしていない多くのゲイ・バイセクシュアル男性は、自らの性的指向が知られることがないように、異性愛者として振る舞い、異性愛者として社会的に適応しようとしている状況があるのではないのでしょうか。自らのセクシュアリティを厳重に抑圧し、ひた隠しにしながら、異性を愛する男性として生活する、そこには異性愛者を装うことによる心理的葛藤やストレス——異性愛者的役割葛藤を生じているのではないかと、いった仮説を立てました。

質問票調査に先立って実施したインタビュー調査から、「結婚話をすすめられたとき」「孫の顔が早く見たいと言われたとき」「彼氏のことを彼女に置き換えて話をしているとき」など15の状況場面を抽出し、異性愛者としての役割葛藤の程度を測定しました。そして、既存の標準化されている抑うつ、不安、孤独感、自尊感情の尺度を同時に用いてその関連を検討しました。そ

の結果、異性愛者としての役割葛藤が強いほど、抑うつ・不安・孤独感の尺度得点が高く、自尊感情得点が低いことがわかりました。メンタルヘルスを阻害する要因は多岐にわたると言えますが、そのリスク要因のひとつに異性愛者的役割葛藤があることが示唆されています²。量的研究としてレズビアンやバイセクシュアル女性を対象に同様の検証をしていないので、一般化することは困難ですが、類似した状況もあるのではないかと考えられます。また、ジェンダーアイデンティティにかかる心理的抑圧や社会的な生きづらさは性的指向とは全く異なる様相があるものと思われます。

アウトティングとは

LGBTQ+全般において、今なおカミングアウトは困難なライフイベントのひとつであると考えられます。カミングアウトは第三者から強要されるものではなく、本人の意思に基づいて自己の存在を示す方法のひとつです。カミングアウトの語源はcoming out from the closetであり、クローゼット（押し入れ）に隠れこもっていないで（自分自身のことを誰にも話さない／話せないでいるのではなく）、表に出ていこう（本当の自分自身について自ら積極的に話していく）という意味合いがあります。

カミングアウトと表裏一体とも言えることはアウトティングです。アウトティングとは、性的指向やジェンダーアイデンティティを本人の承諾なく他者に暴露したり、言いふらしてしまうことを言います。

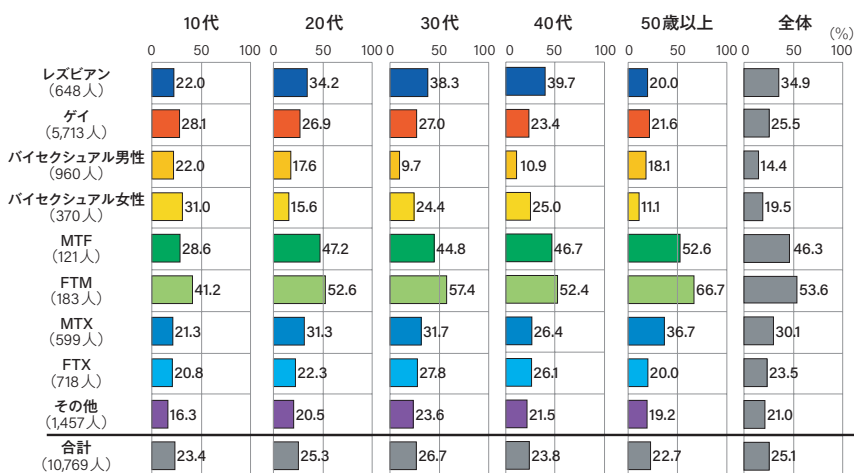
「自分は職場でカミングアウトするのは難しいな」と感じているLGBTQ+当事者にお話をうかがったところ「職場で自分のことが知られたら人間関係が崩壊するような気がする」「もし知られたら蔑まれるに違いない」と強い恐れを抱いている人が少なくないことがわかりました。セクシュアリティについて知られることが自分にとって圧倒的に不利になるであろう、社会的不利益をもたらすのではないかと心配する中で、カミングア

ウトすることは相応の勇気と覚悟をもったゆえの行動です。信頼する相手であるから、付き合いの長い仲のいい友人であるからこそ、偽りの自分ではなく本当のことを伝えたい、知っていてほしいという思いからカミングアウトの決断があると言えるのではないのでしょうか。

アウトティング被害の現状

カミングアウトする側はどう伝えようかと考え何度もシュミレーションして思いを告げるからこそ、面白おかしくあるいは貶めることを目的に言いふらされるようなことがあれば、心底ショックを受けてしまうことでしょう。筆者が2019年にLGBTQ+を対象に実施した調査（有効回答数10,769人）によれば、回答者の25.1%にアウトティング被害経験がありました³（図1）。被害の現状に大きな世代差がなく、どの年齢層においてもアウトティングの被害経験がありました。この数値は回答者の申告によるものであり、本人の知らないところで陰口を叩かれている場合は回答に反映されておらず、集計結果

図1 性的指向やジェンダーアイデンティティを暴露、言いふらすなどのアウトティング被害経験（2019年、日高庸晴調べ）



トランスジェンダー：出生時の性別とは異なる性別で生きる人であり、男性から女性へのトランスジェンダーである MTF は Male To Female、FTM は Female To Male の略である。X ジェンダー：男でも女でもある、そのどちらでもない、性別がない、定まらないといったアイデンティティとして知られる。MTX は Male To X、FTX は Female To X の略である。

は過少見積りとの可能性があると推測されます。

前述のように人間関係が崩壊するとまで思い詰めているLGBTQ+の当事者であれば、アウトティング被害後に職場に行くことができなくなることや、社会的な居場所がなくなっただと感じてしまっただ最悪の場合自ら命を絶つようなことも起こりえます。その一方で、カミングアウトされた側はどのような気持ちでしょうか。勇気を出して自分のことを話してくれたのだから、信頼してくれているから話してくれたのかな、人間関係の距離感が縮まってよかった、と前向きな捉え方をする人が大半かもしれません。他方、突然のことで戸惑いや、秘密を抱えることを強要させられたように思ってしまう、重圧と感じてしまっている人もいるかもしれません。

カミングアウトを引き受けることが重荷であり、心理的負担を感じて一人で抱えておくことができない場合、どうしたらいいのでしょうか。児童生徒・学生など教育機関に属しているのであれば、守秘義務があるスクールカウンセラー

や学生相談室のカウンセラーであれば、個人が特定されない形での相談はアウトティングにならず、安心して相談できると思います。あるいは保護者など信頼できる相手に、第三者に情報漏洩がないよう十分に気を付けたいうえで、話を聞いてもらうこともできるでしょう。「そんなつもりはなかった」けれど、意図せぬアウトティングにつながってしまうことがないよう、細心の注意を要します。

自分の大事な友人からカミングアウトされるかもしれない、そのときどういった反応ができるだろうかとかあらかじめ想定しておくことや、自分のことであれば、信頼する相手にいつのようにかミングアウトするか、あるいはしないかなど、それぞれの「カミングアウト」との付き合い方をあらかじめ考えておくのはどうでしょうか。



ひだか・やすはる

京都大学大学院医学研究科博士後期課程修了。博士（社会健康医学）。専門は社会疫学、公衆衛生学。著書に『LGBTQ+の健康レポート』（単著、医学書院）、など。

¹ LGBTQ+: Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Questioning/Queerの略であり、これ以外の性的指向やジェンダーアイデンティティといったセクシュアリティの有様を+（プラス）で表現するようになっていきます。 ² 日高庸晴（2000）『思春期学』18、264-272。 ³ 日高庸晴（2024）『LGBTQ+の健康レポート』誰にとっても心地よい医療を実現するために。医学書院。 *COI:2019年調査は、ライフネット生命保険株式会社からの委託研究として実施しました。

感情はなんのため？ 感動はなんのため？

金沢工業大学メディア情報学部 准教授

加藤樹里



かとう・じゅり

2017 年、一橋大学
大学院社会学研究
科総合社会科学専攻
博士課程修了。博士

士（社会学）。2025 年より現職。専門は感情心理学、社会心理学。論文に Effects of finitude salience and value orientation on the feeling of being moved, *International Journal of Psychology*, 59, 1199–1207, 2024 など。

皆さんが日々感じる、喜怒哀楽などの感情。その感情は、なんのためにあると思いますか？

感情心理学への誘い

感情心理学のさまざまな理論では、感情とはなんなのか、私たち人間になぜ感情という機能が備わったのか、を考え続けています。例えば皆さんも、「感情的に行動すると損をするので、理性的に行動しよう」という教訓を聞いたことがあるかもしれません。ここには、感情が論理的・合理的な判断の邪魔者というニュアンスがありそうです。確かに誰しも浮かれたときや怒ったときの発言を後悔したという経験があるかもしれません。しかし、感情が理性の邪魔者でしかないとしたら、なぜ今の私たちは、こんなにも日々感情を感じるのでしょうか？ 不要ならば、人間の進化の過程でとっくになくなってしまっていたほうがよかったのではないのでしょうか。

「感情有用説」は、感情は人間に役立っているという立場です¹。役に立つというのは、自分自身の生存のため、あるいは自分個人を超えて、集団や社会がうまく働いていくためにも役立っている、など多くの側面を含みます。感情理論の代表的なものの一つに「基本感情理論」がありますが、この理論では、私たち人間が生存し、子孫を残すために必要な感情がパッケージとして備わっていると考えます²。例えば「恐怖」には、危険を感じる状況があって、主観的には「怖い」と感じ、身体反応としては逃走できる準備状態となり……、このように、感情ごとのプログラムがあるイメージです。このプログラムが即座に働くからこそ、私たちは今ここにいるのかもしれません。アニメ映画『インサイド・ヘッド2』が2024年にブームになりましたが、この映画は基本的にこの理論の立場に立っていると考えられます。喜びや悲しみ、恐怖といった感情が、別個のものとして描かれ、主人公のために行動しています。

他方で、個々の感情に独自の機能があるという考え方はしない理論もあります。例えば、そのうちの一つにコアアフェクト理論があります³。この理論では、感情の核心（コア）となるのは、身体の内臓の感覚（例：心臓の拍動）の情報であると考えます。その情報に「私は今悲しみを感じている」などの感情のラベルを割り当てることで、私たちは感情を認識します。この過程は色の認識にもたとえられます。色を認識するときには反射光を網膜で受容しているのは事実ですが、その情報に「赤」色を割り当てるのは主観的な認識です。この発想からすると、赤とピンクの境目が厳密に事実として決まっているわけではないのと同様に、感情が別個に事実として存在するという考え方を否定します。これら以外にも、感情の多様な理論が打ち出されています。「定義を求められるまでは、誰もが感情とは何かを知っている⁴」と思われそうですが、いざそれをつかもうとするとするりと逃げていくような、難しい心理現象であると思います（だからこそ、研究は魅力的なのですが）。

感動って面白い

感情には機能があるという発想は、より複雑な感情にも適用できると考える研究者は多いと思います。私もこの立場から「感動」を研究しています。

皆さんは、最近何かに感動しましたか？ その対象は、小説、映画、演劇などの物語、音楽や絵画といった芸術、果てのない星空や雄大な森といった自然などとさまざまかもしれません。私たち、特に日本人はそれらに心を強く動かされたとき、頻繁に「感動した」と言います。涙や鳥肌、胸の温かさといった身体の反応を伴うことも多いです。それでは、感動はなんのためにあるのでしょうか？

現在の研究知見をもとに回答すると、感動はあなたの中核的価値を確認したときに生じると言えます。感動研究は萌芽期にあり、まだ諸説あることを大前提としますが、ランドマンら⁵や筆者ら⁶は、価値観が感動の強さに影響することを繰り返し示しています。例えば、家族は大事という価値観の人が、家族愛を描いた映画を見たときに強く感動します。皆さんの感動経験を思い浮かべていただくと、恐らくその感動対象には、皆さん

自身が大事に思っていることが含まれていると思います。それは典型的には人間愛が多いのですが、それ以外にも努力や目標達成、美しさ、であったりもするでしょう。このように、感動は価値を見つけたときに起こる感情と言えますが、ではなぜ価値を見つけたときにわざわざ、涙を流したり鳥肌が立ったりするほどの強い反応が起こるのでしょうか？

筆者らの研究では一つそのヒントを得ています。人間の能力や時間が「有限」であることを意識すると、意識をした課題とは関係のない物語に対しても、感動が強くなるという結果がみられました⁶。「真善美^{しんぜんび}」といった究極的な価値は、永遠性をもつと考えられます。それに対して私たち人間は、本当にちっぽけで、常に限界を抱えています。その有限性に普段は見えて見ぬふりをしていますが、あらためて有限性を意識すると、対照的に永遠性をもつ価値を希求し、感動すると言えるかもしれません。もちろんその価値はなんでもよいわけではなく、一般的によいとされている価値に限るわけでもなく、他でもないあなた自身にとって、人生の中核である必要があります。つまり感動の機能とは、限りある自分の生を見つめたときに、その限界に絶望するのではなく、中核的価値を再認識させることにある可能性があります。ただし、これらの考察はいち感動研究者としての私の研究で示唆されていることなので、唯一の真実とは言えないことに注意が必要です。さらに言えば、本当に感情すべてが有用なのかも分かりません。進化の過程で生まれたエラーでしかなく、なんの意味もない心の動きなのかもしれません。ですが、感動を含めた感情に大事な機能があるという発想は、人間の心の理解をより深めてくれると思います。

どうも私たちは、感動することで、かけがえのない価値を見直しているようです。それはもしかすると、私たちには未来が見えすぎてしまうためかもしれません。人間には絶対に避けられない限界があり、それに私たちは気づくことができ（てしまい）ます。そんな人生の中での一筋の光が、感動という感情なのかもしれません。

1 大平英樹編 (2010) 感情心理学・入門。有斐閣アルマ 2 Cosmides, L., & Tooby, J. (2000) Evolutionary psychology and the emotions. In M. Lewis, & J. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions*, 2nd ed. (pp.91-115). Guilford Press. 3 バレット, R. F./高橋洋訳 (2019) 情動はこうしてつくられる: 脳の隠れた働きと構成主義的情動理論. 紀伊國屋書店 4 Fehr, B., & Russell, J. A. (1984) *J Exp Psychol Gen*, 113, 464-486. 5 Landmann, H. et al. (2019) *Cogn Emot*, 33, 1387-1409. 6 Kato, J. (2024) *Int J Psychol*, 59, 1199-1207.

あなたの周りの心理学

第12回

“スイーツ心理学”って なんですか？

A スイーツ心理学は、甘い食べ物が高人の心理や行動に与える影響を研究する学問であり、ポジティブな感情を喚起する仕掛けを考案することで、社会的な問題解決を目指しています¹。日常的にもスイーツを食べて気持ちを切り替えて仕事を頑張った経験や、疲れた時にスイーツを食べて癒された経験をした人も多いのではないのでしょうか。また、友人や家族と一緒にスイーツを楽しむことで、社会的な絆を深めた経験もあるのではないのでしょうか。帝塚山学院大学では、「おやつと心の、ふしぎな関係。」というキャッチフレーズを付けたロゴマーク（図1）を掲げて、このようなスイーツの喫食に伴う心理や行動について心理学的に研究して、学問としての知見を蓄積しています。また、社会的な文脈の中で心理学の知見や手法を駆使した問題解決に取り組んでいます。

スイーツに特化した心理学

スイーツは、日常的に消費される食品であり、研究者にとっても実験協力者にとっても非常に身近なもので、ポジティブ感情を喚起する実験刺激としても有望であると考えられます。スイーツの喫食は五感を伴った心理的なプロセスとして捉えることができるため、知覚・認知心理学の視点からスイーツがもたらす心理効果やそのメカニズムについて探求することができます。また、スイーツは社会・文化的にも特別な意味を持つことが多く、社会的なつながりやコミュニケーションの場面で機能的に作用していると考えられるため、社会心理学の視点からスイーツがもたらす効用やそのメカニズムについても探求することができます。このようにさまざまな心理学領域の視点からスイーツに特化した研究を行うことで、日常生活におけるポジティブ感情に関

する学術的な知見を幅広く蓄積することができます。

スイーツの心理学的評価

スイーツを対象とした心理学研究に取り組む際の評価手法の一つとして心理尺度を用いた主観データの収集があります。心理学の尺度構成法に基づいてスイーツに特化した心理尺度を構築することで、スイーツの喫食に関わる抽象的な概念を定量的に評価することができます。具体的には、スイーツ心理尺度（短縮版）²がすでに作成されており、スイーツに関わる心理状態を網羅的に測ることができます。スイーツ心理尺度（短縮版）は、「目的」尺度（6因子）、「購入前から食べる前」尺度（2因子）、「食べている時から食後」尺度（6因子）の3尺度から構成されており、スイーツの購入前から摂取後までのプロセスの中でさまざまな心理的变化を捉えることができます。このスイーツ心理尺度（短縮版）は、スイーツに特化したさまざまな心理学研究に活用することができます。加えて、現実場面におけるスイーツの消費者心理を網羅的に把握する際にも利用できますので、企業におけるマーケティング研究や商品開発においても役立てられると考えられます。

スイーツの心理効果

スイーツがもたらす心理効果に関する筆者らの研究として、「チョコレート喫食による心理効果と有効視野の関係」があります³。この研究では、普段から好んで食べているチョコレートを喫食することでポジティブ感情が喚起されて、視覚的注意範囲である有効視野が拡大されることを示しています。つまり、チョコレートを食べて快感が生じて、その結果として人間は一時的に通常より広範囲の視覚的な情報を取得して処理できると考えられます。例えば、スポーツ選手が好みのチョコレートを



帝塚山学院大学総合心理学部 教授

大本浩司

だいもと・ひろし

専門は人間工学・心理学。博士（学術）。企業（電気メーカーや輸送機器メーカー）での研究開発を経て、2017年より現職。心理学の知見や手法の産業応用に取り組む。

直前に食べてから競技すると、いつもより周りへの注意が広がって好成績を収めることができるかもしれません。このようにスイーツの喫食は、人間がアクティブに行動する場面でも効果的に作用することが示唆されています。

スイーツ心理学の産業応用

心理学の知見や手法を社会的な文脈の中で問題解決に活かす場合、人間中心設計に基づいた取り組みが有効であると考えられます⁴。人間中心設計は、モノ中心ではなく、人を中心としたモノやサービス作りのプロセスや方法論を体系的に整理したもので、実際に企業の研究開発において心理学に関する知見や手法が活用されている事例もあります⁵。例えば、スイーツを対象とする場合であれば、スイーツを食べる体験を特別なものにするために、フィールド調査から消費者のポジティブ感情に影響を及ぼす要因を抽出した上で解決案を策定します。また、消費者からのフィードバックをアンケート調査やインタビュー調査を通じて収集することで、スイーツの開発やマーケティング調査へ役立てられます。スイーツ心理学では、このような人間中心設計に基づいた検討を重ねることで、より効果的な問題解決へと導くことができると考えています。その際、ポジティブ心理学や感性工学の知見を踏まえることで、より人間理解に基づいた商品やサービスの開発へ展開できると考えられます。

スイーツ心理学による社会連携

スイーツ心理学では、学術研究にとどまらず、スイーツに関わる人間特性の理解に基づいた社会的な問題解決を目指しています。例えば、帝塚山学院大学では、

図1 スイーツ心理学のロゴマーク



スイーツ心理学の実習授業が行われています。この授業では、食品関連企業の協力を得て、人間中心設計に基づいて各種スイーツの体験価値を分析して、消費者視点から現状の問題を解決するアイデア考案を行っています。さらに、地域密着型の社会貢献として、地元企業と連携した商品開発を行い、地域活性化を目指したイベントで販売促進活動などの取り組みを行っています^{1,6}。

スイーツ心理学の展望

スイーツ心理学は、日常にご褒美として消費されることが多い「スイーツ」という身近な嗜好品を研究対象としています。このスイーツは、一般的に人々の記憶の中ではポジティブ感情と結びついていることが多く、心理的な報酬としての役割を持っています。われわれがスイーツを摂取すると脳内の報酬系が活性化して、特定の行動が条件づけされて習慣化することがあります。この点は注意しないと過食や中毒などの問題が生じてしまいます。スイーツ心理学では、このネガティブな側面に配慮しつつ、特にポジティブな側面に焦点を当てた心理学として取り組んでいます。日常生活の中でスイーツを楽しむことは、心の健康や幸福感を高める手段として重要であり、さまざまな心理学の知見や手法を駆使して幸せの輪を広げる貢献をしていきたいと思っています。

1 大本浩司 (2022) エモーション・スタディーズ, 8, 23-27. 2 大本浩司他 (2023) 帝塚山学院大学研究紀要, 3, 55-74. 3 山中仁寛他 (2024) 人間工学, 60, 43-50. 4 黒須正明 (2013) 人間中心設計の基礎, 近代科学社. 5 大本浩司他 (2011) 国際交通安全学会誌, 36, 14-23. 6 大本浩司他 (2021) 帝塚山学院大学研究紀要, 1, 83-96.

裏から読んでも心理学

初心忘るべからず

平石 界
慶應義塾大学文学部教授



ひらいし・かい
東京大学大学院
総合文化研究科
博士課程退学。
東京大学、京都

大学、安田女子大学を経て、
2015年4月より慶應義塾大学。
博士(学術)。専門は進化心理学。

「一見したところ平凡な少女の隠れた才能に、落ちぶれた元名コーチだけが気づいて云々」というストーリー、ありますよね。あの手のものを目にする、ある俳優さんのことを思い出します。彼女がデビューしたところ、なんで事務所はこんな強烈に押してるんだらうってさっぱり分からなかったんですよ。ところがそれから数年、ふとした機会に出演ドラマを見てみたら「そういうことか」と納得しなくて、今や人気実力ともに日本を代表する俳優の一人に。なるほどこれがプロの眼力というものか。

とは言うもののあの手のサクセスストーリー、才能を見出すのが「落ちぶれた元名コーチ」ってのもよくある設定で、その理由が他の人には見えないものが見えてしまうことだったりしますよね。それで変人扱いを受けて周りから浮いてしまっただけで云々という。

何がって敵対的摂動 (adversarial perturbation) の話です。チャット君 (GPT) の登場でみんな忘れちゃってますけど、ほんの少し前までは機械 (AI) が犬や猫の画像を見て「犬!」「猫!」と識別できる“だけ”でも大したニュースでした。そんな盛り上がりにも水を差したのがこれ。誰がどう見てもパンダにしか見えない画像にこの敵対的摂動って隠し味を添加するとあら不思議、それまでどこまでも正確だったAIが「テナガザル!」とか答えるようになってしまっただけで、AI君も随分賢くなったようだけどまだまだだねえ、なんてため息をつかれたりしたのです。

それから数年「いや実は見えてなかったのは人間でしょ」という記事をネットで見つけて (佐藤竜馬, 2025)、何それ? と元の論文を読んでみたのです (Ilyas et al., 2019)。正直、数学サボってる勢ゆえ読み切れていないところが多々あって恥ずかしいのですが、ザックリと大枠だけでも。例えば犬の画像には、人間には見えない「犬っぽい」特徴が含まれているということです。でもそれだけを取り出すと人間にはノイズにしか見えない。その犬ノイズを他の画像 (猫とか) に添加したものを作って「これは犬ですよ」とAIに教え込むのです。人には猫にしか見えないのだけど「犬だよ」「犬だよ」と教え込む。それから犬の画像を持ってきて、AIに「これはなに?」と尋ねたのです。

分かりにくいと思うので、こんなことを想像して下さい。猫を次々と見せられて「これはköpekですよ」と教えられるのです。実はその猫🐱画像には犬ノイズが添加されてるのだけれど人間には分からない。逆に猫ノイズ付き犬🐶画像は「kediですよ」と教わる。一通り学んだあとで混ぜり物のない犬の画像🐶を見せられて「これなに?」ときかれる。思わず「kediでしょ」と答えそうなところ、AIは🐶をköpekと答えたっていうんです。ちなみにköpekはトルコ語で犬の意味。AIには犬ノイズがきちんと見えていたので「あーこのパターンはköpekだな」と識別できた。AIが敵対的摂動に弱いってのは勘違いで、AIはむしろ人に見えないものを見ていた。元名コーチの目はくるってなかったってことでしょうか。

ああ、いつものAIがすごいって話ね、と思われる方もいるでしょうけど、少し違うような。確かにAIさん、「追試が失敗しそうな社会科学論文を論文テキストから当てる」なんてことをやってのけたりするものの (Hewitt et al., 2024)、「9才までの生育環境からその子の15才時の成績を当てる」ってタスクだと大したことなかったりする (Lundberg et al., 2024)。決して万能ではない。犬猫の識別も百発百中ではありませんでした。ポイントは人間の方であって、私たちは世界に存在するパターンの全てを認識できてるわけではないってことでしょう。「そんなノイズに“犬っぽさ”があるはずない!」と言いたくなる気持ちは分かるけれど、これは受け入れざるを得ない。それに考えてみれば、人間には知覚できない外界情報があることなんて、紫外線や超音波の例を引くまでもなく、心理学の基本のキなのでした。

私のワークライフバランス

私のワーク×ライフサイクル

山梨英和大学人間文化学部 助教

小田友理恵

普段より臨床、研究において「ライフ」に関わっていらっしゃる小田先生。臨床・研究と日々の生活との、身体を通した結びつきの大切さを語っていただきました。

私の研究テーマは、臨床心理学における科学者－実践者モデルです。資格取得のために入学した大学院で抱いた、臨床をするのになぜ研究をしなくてはいけないの？ という素朴な疑問から探究が始まり、今に至ります。そしてありがたいことに現在、私の「ワーク」は臨床実践とその研究（および教育）です。

ライフにはご存じのとおり生活・生命・人生といった意味がありますが、私のワークはまさに「ライフ」に携わるものであると意識させられることが多くあります。臨床では、相談にいらっしゃる方々や一緒に働く方々と過ごす時間の中でそのことを実感しています。また、研究でもライフを扱っていることにあらためて気づかされる瞬間があります。臨床心理学史の研究では臨床心理学という学問の歴史を紡いできた先達の生き様を知り、質的研究ではインタビュー調査やテキストデータから研究協力者の人生の一端に触れ、量的研究では統計処理をとおして得られた結果からある集団の声なき声が聞こえるような気がしました。臨床もその研究も、人々のライフそのものに触れる性質を持ちます（よく考え

ると、ライフに関係しないワークはこの世には存在しないとも言えますが）。そのため、学問としての臨床心理学は、その主たる基盤を研究論文や学術書に求めますが、それらだけでは決して成り立たず、大学や大学院のカリキュラムには実習や演習の科目が組み込まれています。

日々の生活が生命を支え、人生を織りなしていくことを考えると、ライフの根幹は日々の生活にあるのだと、当たり前のことながら近頃気づきました。衣服を身につけ、食べものを準備して（あるいはしていただいて）食し、土地と家に住まう。家族や友人とともに時を過ごす。美味しいものを味わう。テレビやインターネット、本などで新たな世界や異なる価値観に出会う。趣味のコミュニティに参加する。エンターテインメントや芸術作品など誰かの創造性に感情を揺さぶられる。旅に出て知らない土地を訪れる。運動して自分の身体と向き合う。動植物や自然に接する。笑ったり泣いたり怒ったり。時には疲れたり、落ち込んだり、打ちひしがれたり。それでも、誰かの存在や優しさに救われて、また少しずつ立ち上がる。そして今度は自分自身が誰かの力になれるようにと願う。

研究会や学会への参加といったアンオフィシャルな自己研鑽の機会を含む仕事の時間と、それ以外の私的な時間、その中間もあわせたこれまでの人生すべての時間の体験が織り重なって、「今ここ」の私という身体と私の身体感覚が形づくられています。ちなみに、このような見方や考え方は臨床技法であるフォーカシングを考案したジェンドリンの哲学から学びました。そして、その身体でもって臨床や研究の場に立ち、同じように生きている身体を持つ目の前の人（あるいは誰かが過去に発信したもの）と交流をし、その瞬間に今までなかった何か新しいものが生まれるのを目の当たりにしたときの驚きと感動は、私の人生にとってかけがえのないものです。

さて、本稿のテーマは「私のワークライフバランス」でした。一般的に語られる際の意味とは少し異なるのかもしれませんが、今の私にとってのワークとライフは「ライフがワークを紡ぎ」「ワークがライフを豊かにする」という循環関係にあります。この関係は、私自身の研究テーマである科学者－実践者モデルにおける科学と実践の関係に似ているのかもしれませんが。これからも、いただいたお仕事と日々の生活を大切に、臨床と研究の両立の道を歩んでいきたい、と考えています。



おだ・ゆりえ

2020年、法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻博士後期課程修了。博士（学術）。2025年4

月より現職。専門は臨床心理学。分担翻訳に『心理学者の考え方：心理学における批判的思考とは？』（新曜社）など。

この人 を たずねて

木村元洋氏 インタビュー

産業技術総合研究所人間情報インタラクション研究部門
認知機能研究グループ 研究グループ長

聞き手
岩根榛花



きむら・もとひろ 2007年、北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士（教育学）。2007年に日本学術振興会特別研究員PD（名古屋大学・ライプチヒ大学）、2010年に同・海外特別研究員（ライプチヒ大学）、2011年に産業技術総合研究所ヒューマンライフテクノロジー研究部門研究員、2021年に同・ヒューマンモビリティ研究センター研究チーム長を経て、2023年より現職。専門は生理心理学。著書に『生理心理学と精神生理学 第Ⅱ巻』（分担執筆、北大路書房）など。

産総研に入ってからすぐに企業との共同研究をはじめましたが、最初はうまくやるのが難しかったですね。例えば、企業からリクエストの多いお題の一つは、実環境でサービスやプロダクトを利用している人間の心理的状态を脳波・事象関連電位で評価したい、というものです。一方、アカデミアの研究では、ノイズの少ない実験室で、統制された実験パラダイムを用いて脳波・事象関連電位成分を計測するのが主流です。最初の2～3年、このギャップに悩みました。それまでの自分が「現実世界の人間」を相手に研究できていなかったことを突き付けられた、とも言えますね。これを打開するために目指したのは、実環境の活動場面で汎用的に使えて、かつ企業の関心の高い心理的状态（例えば、集中、努力、楽しさなど）にアプローチできる生理心理学的評価技術を作ること。そして、それらの心理的状态がどんな仕

——先生の研究テーマについて教えてください。

私は学部・修士・博士時代を北海道大学で過ごしましたが、その頃から取り組んできたのは、脳波・事象関連電位を使った生理心理学研究、特に人間の視覚についての研究です。これまでの研究でわかったことは、私たちの視覚システムは、対象物の動きの中にある規則性をもとに、対象物の一瞬先の状態を自動的に予測しているということです。例えば、キャッチボールの際、私たちは飛んできたボールを難なくキャッチできます。人混みの中でも、人とぶつからずにスイスイ歩くことができます。こういった行動の背景には、視覚システムの自動的予測の働きがあると考えられます。さらに、この自動的予測は、対象物が予測と異なる動きをした場合、それに瞬時に気づくことも可能にします。この予測の働きには個人差もあります。脳波・事象関連電位を活用することで、普段私たちが意識せずに行っている「見る」という行為を支えている仕組みの一端を知ることができます。

——博士のころに行っていた研究は今も継続しているのですね。

少し脱線しますが、私は学生時代、

文学や芸術への関心が強くて、心理学にはあまり興味がなかったのですが、何の因果か、偶然出会った生理心理学がじわじわと面白いものになり、それが仕事になりました。手を動かして実験を重ね、物事の仕組みを紐解いていく地道なプロセスが気質に合っていたのかもしれません。心理学に興味は薄かったぶん、研究テーマを決めるのに苦労しましたが、修士の頃、それまで報告のなかった脳波・事象関連電位成分を運よく発見し、それが自分のコア・テーマになりました。学位取得後も、学振（日本学術振興会）の特別研究員PDや海外特別研究員として、日本とドイツを行き来しながらこのテーマに没頭しました。その後、産業技術総合研究所（以降、産総研）に就職しましたが、今でもこのテーマは継続しています。若い頃に比べてかけられる時間はだいぶ減りましたが、逆に国内外の若手との連携が広がっていますので、今はそちらを中心に進めています。

——産総研に所属すると、実験室実験よりも、現実場面に近い応用的な研究に取り組む必要があると思いますが、研究への取り組み方に変化はありましたか。

組みで生まれるかを説明する包括的な理論を作ることでした。こういった仕事と一緒に取り組める同僚にも恵まれ、評価技術開発と理論構築をうまく進めることができました。少し具体的にお話すると、例えば、私たちは運転中、何気なく車速を上げ下げしていますが、これは自身の能力とタスクの負荷のバランス維持の観点から理解できます。車間距離や交通環境に応じてタスクの負荷は刻々と変化しますが、私たちはこの負荷の変化に合わせて車速を上げ下げし、自身の能力発揮レベルを一定範囲内に収めているわけです。しかし、約束に遅れそうなどきなどは速度を上げざるを得ません。そんなときは、高い負荷に見合うよう能力発揮レベルを高めて、集中・努力して運転する。楽しさも変化する。このように、負荷と能力のインタラクションの産物として心理の状態を位置づけ、それを脳波・事象関連電位、瞬目信号、心臓血管系反応などの複数の生理反応で捉える。これが私たちの基本的な研究スタイルです。

——今後の研究の展開について教えてください。

ここ最近では心理的ウェルビーイングの研究にも着手しています。産業界でもホットなトピックの一つですが、研究としてどう扱うかは悩みますね。社会心理、発達心理、人間工学など、多様なバックグラウンドの人間研究者からなるプロジェクトチームを作り、まずはウェルビーイングをどう捉えたら面白い研究ができるか、心理学はもとより、哲学や社会学をはじめとする色々な分野を勉強しています。また、先ほど述べた能力発揮とウェルビーイングの関係についての考察も進めています。さらに、生理心理計測についても、先ほど挙げた中枢・末梢系に加え、内分泌系や免疫系も含めた実験系の構築を進めています。ウェルビーイングをどう評価し、どう働きかけ、どう産業応用につなげるか、私たちがなりの知見を発信していきたいですね。——最後に、若手研究者に向けたメッセージをお願いします。

有益なメッセージになるかわかりませんが、大きく三つあります。一つ目は、「良いタスクを与えてくれる人との関係を大切にすること」です。良いタスクが目前にないと力

が湧いてこないのが人間の本性でしょう。学生時代から今までを振り返ってみると、その時々で、「難しそうだけどやるに値すると思えるタスク」を目の前に示してくれる人との幸運な出会いに恵まれたと感じます。そんな出会いを大事にしてほしい。二つ目は、「ときに自分の職能を広く捉えてみること」です。研究を続けていると、専門外のテーマに取り組まなければならない場面も少なからず出てきます。そんなとき、自分を大きく「人間研究者」として捉え、前向きに取り組んでみてほしい。自分自身の能力についての思わぬ発見や、研究者としてのスケールの広がりにつながると思います。三つ目は、「心理学以外の教養も大事にすること」です。面白い心理学研究をされている方には、心理学以外の教養にも富んだ方が多い。そういった教養は、心理学の活かし方を俯瞰的に捉えることにつながります。幅広い教養に裏打ちされた、鋭くユニークな「人間の見方」ができる研究者。そんな研究者に私も憧れますし、皆さまにもそんな研究者を目指してほしいですね。

聞き手はこの人

インタビューを終えて

木村先生は生理心理学の基礎研究で国際的に活躍されているトップランナーです。産総研では、企業との共同研究を数多く手がけられるなど、基礎のみならず応用まで高いレベルの研究が行われています。幅広く研究を行うことは、やりたいと思えば誰でもできると思いますが、それを高いレベルで行うことは容易ではないと考えています。微視的になりすぎるか、大雑把になりすぎてしまうためです。お話をうかがう中で気づいたことは、木村先生が、研究という営み

を俯瞰して見つめることと、研究対象を細かくていねいに調査することを同時に行われているということです。私の能力や資源だけでこれができるかと問われると返事に困りますが、他の人たちも巻き込んで、よい仕事・研究をできるようになりたいと感じました。

私自身は、認知心理学のノウハウを製品やサービスの開発に生かすべく、まずは博士課程まで進み、アカデミックな研究を学びました。今年度からはIT企業で、ユーザーの製品利用体験の調査業務に従事することになりました。開発の

現場で心理学をどう役立たせるのか、私にとっての「武器」とは何か、それをどうよい仕事につなげていけるのか、自分なりに考えていきたいと思っています。



いわね・はるか

サイボウズ株式会社開発本部。筑波大学人間総合科学術院人間総合科学研究群博士後期課程修了。博士（心理学）。専門は認知心理学・認知科学。共著論文に「店内で商品を探す行動とサインの相互作用」、そしてその加齢変化『認知科学』31, 573-586, 2024 など。

心理学ライフ

ラテアートのすゝめ

人間環境大学総合心理学部 講師

徳岡 大

2年ほど前からラテアートを始めてみました。ラテアートは、ラテをいれるときに、ミルクの注ぎ方を工夫したり、液面をキャンパスに見立てて絵を描くものです。私がはまっているのは、ミルクの注ぎ方を工夫するだけで模様を描くフリーポアという技法を使うラテアートです。現在は、研究室にエスプレッソマシンを持ち込んで、一息入れたいとき、気分に合わせてラテを作っています(図1)。私一人では1日に何杯もラテを飲めないのが、研究室を訪ねてこられた方や同僚に私のラテを飲んでもらうことで、ラテアートを描く練習回数を増やしています。

図1 研究室に持ち込んだエスプレッソマシン



珈琲を好んで飲むようになったのは大学院生の頃からでしたが、カフェラテを好んで飲むことはなかったように思います。珈琲にミルクを入れると珈琲もミルクも薄まった気がしていました。おしゃれなものへの警戒心があったのか、ラテアートは写真映えを意識しただけの飲み物で、そんなにおいしいものでもないと思っていました。あまり印象のよくなかったラテアートでしたが、1杯のラテアートにはさまざまな技術が詰まっているという話を聞き、

ちょっとだけ興味がわき、ものは試しと喫茶店でラテアートを注文してみることにしました。

初めて体験したラテアートは、見た目がツヤツヤと綺麗なだけでなく、非常においしいものでした。上層にあるなめらかな口当たりのミルクと、その下に隠れる珈琲とミルクの混ざった液体が、一口目から同時に口の中に入ってきます。蒸気によって空気を入れながら適度に温められたミルクは、砂糖を入れずともほのかに甘く、珈琲とミルクの混ざった液体は、それぞれ単独では味わうことのできない一体感のある味わいとなっていました。このときからラテアートの印象ががらっと変わりました。珈琲の楽しみ方としてカフェラテも加えてみたくなり、せっかくするならラテアートもできるようになりたいと思いました。

機材や道具をそろえてさっそくラテアートに挑戦してみるのですが、アートを描く練習にはたどり着けず、ラテアートにさまざまな技術が含まれていることを身をもって体感しました。ラテアートするには、高い気圧を加えながら抽出する濃い珈琲であるエスプレッソと、空気を適量含ませながら温めたスチームドミルクが必要になります。エスプレッソマシンを使って、これらを用意することになるのですが、珈琲豆をちょうどよい細かさにしないと、エスプレッソが数滴しか落ちてこなかったり、ドリップした珈琲と変わらないようなエスプレッソが出てきてしまった

り、空気を入れすぎて泡だらけのスチームドミルクができてしまったり、ラテアートを挑戦する入り口に立つために必要なことがいろいろとありました。始めるときに想定した以上に大変だとも思われたのですが、うまくできると目に見えて見た目が変わり、質感が変わるせいか感じるおいしさも変わるので、それはそれで楽しくもあります。

ラテアートは、スチームドミルクをどのくらいの高さから注ぐのかによって、ミルクを浮かせたり、エスプレッソの下に沈みこませたりすることができ、ミルクを注ぐ強さによっても浮かび上がる模様が変わってきます(図2)。自分の手の動きによって、浮き上がる模様をコントロールできる感覚が、少し不思議で面白いです。イメージ通りに模様を作れるようになったら、オリジナルのラテアートを考えて、作ってみたいものです。

図2 リーフ柄の自作ラテアート



とくおか・まさる

心理学(博士)。専門は教育心理学、心理統計教育。著書に『心理学統計法』『あなたの経験とつな

がる教育心理学』(ともに分担執筆、ミネルヴァ書房)など。

心理学ライフ

音楽との付き合い

昭和女子大学人間社会学部 准教授

池上真平

幼い頃からいろいろな楽器に触れて育ちました。特にドラムは5歳頃から始めて以来ずっと好きな楽器です。中学2年生の時にボンジョヴィにハマったことをきっかけに、次第に「自分も音楽で人の心を震わせられるようになりたい」とプロの音楽家になることを意識するようになりました。

高校1年生の時、ドラムの師匠の代役で初めてプロの舞台に立ちました。荒削りな演奏でしたが、お客さんが立ち上がって私に温かく拍手をしてくださいました。高揚感とともに「自分の年齢に関係なくお客さんを魅了できる音楽家になる」と心に誓いました。夏には音楽コンテストにドラムソロで出場して、かなり浮きましたが特別賞をいただいたりもしました。

大学生になると音楽活動三昧の日々を送りました。自分がプロで食べていけるか大学生のうちに判断したいと考えていたので、必死でした。しかし転機は突然訪れます。ある日のレコーディング後に重い機材を一気に担いだ時、右肩に激痛が走りました。「まずい」と思った時にはすでに遅く、腱を損傷してしまいました。思うようにドラムを叩けない日々が続く、自分で設定した基準に大学生のうちに達せない現実に直面しました。目標を失ってしばらく自暴自棄な生活を送っていましたが、そんな私を見て、ドラムをしていたバンドの一つが、今度はキーボードで声をかけてくれ、全く腕に自信はなかったものの、二つ返事で引き受けました。すると、4年生の冬にはそのバンドで幕張メッセという大きなステ

ージに立つことができました。この時、自分が拳を上げたタイミングで、客席からちょうど歓声が起こりました。「こりゃあ癖になるなあ」と呟きながら、ふとまた心に情熱が戻っているのを自覚しました。大学院入試の直前のことで、楽屋や行き帰りの電車でも受験勉強をしていました。

大学院に進学してからも音楽活動は続け、日本ロックの黎明期を築いた方々と共演する機会が増えました。ほぼぶっつけ本番で迎えたある日のステージでは、原曲とは違う展開で演奏がどんどん進んでいきました。ご本人たちは堂々としており、私も流れが読めない濁流の中を進むようなスリルを楽しみました。何とか無事に曲が終わりホッとしていたら、最前列のお客さんが今まで見たことないくらい感泣していることに気づきました。音楽は予定調和ではないか、ナマモノなのだと、レジェンドたちから学んだ夜でした。

博士後期課程の頃には、マニピュレーター（音楽家が生演奏しきれない音を流す役割）も始めました。この時に学んだ技術は、今でも研究で活かされているのですが、なにより先輩が担当する人気アーティストの現場にも帯同させていただくなかで一流の音楽家やスタッフの方々のお仕事を間近で見てノウハウを吸収できたのは、何事にも変え難い経験でした。

一方、段々と音楽活動が続けるのが難しくなりました。ある時は、自分が録音したギター演奏がさいたまスーパーアリーナでのコンサートで使われ



ることになったのですが、大学の助手の就職面接が重なって泣く泣く会場に行くことをあきらめました。後日テレビでそのコンサートを見て、「身体が二つ欲しかった」と悔やんだものです。結局この時に大学への就職が決まり、音楽活動から身を引くことにしました。

このように、私の人生にはいつも音楽がありました。とはいえ特に一つの楽器を極めたわけではなく、音楽家としても無名です。今は音楽の研究を続けていますが、研究者としても満足できるレベルに達していないというあたりさまで。なんだかどれも中途半端で悲しくなりそうです。ですが、いろいろな角度で音楽と関わったことでめずらしい人生を歩めているとも思います。かつて一緒に演奏していた友人や先輩は、今第一線の音楽現場で大活躍しています。うれしくなるとともに、自分も負けてはいられないと奮い立ちます。「自分も研究で人々の役に立つ仕事をしたい」と、心を密かに燃やしています。

いけがみ・しんべい

博士（心理学）。専門は音楽心理学・認知心理学。著書に『音楽知覚認知ハンドブック：音楽の不思議の解明に挑む科学』（分担執筆、北大路書房）など。

Over Seas

そこに行かなければならない理由

立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員／関西大学神経美学・芸術心理学研究室 CREST 研究員

保子英之



ほし・ひでゆき ロンドン大学ユニヴァーシティカレッジ MSc in Cognitive Neuroscience 修了。ウィーン大学美術史研究所、マックスプランク経験美学研究所、株式会社リコーなどを経て2024年より現職。博士（医学）。専門は神経美学、脳磁計。共著論文に The eye tracks the aesthetic appeal of sentences, *Journal of Vision*, 18(3), 19.

“Because of you.” 初めて対面した憧れの先生との面談で、なぜロンドンに来たのかと尋ねられて、乏しい英語ボキャブラリーの中から私がかんたかひねり出した言葉です。

2013年当時、私の専門とする「神経美学」はまだ学問として発展途上で（いまもまだそうかもしれません）、腰を据えて研究ができるラボは、世界中どこを見てもロンドン大学のセミール・ゼキ教授のところ以外にはありませんでした。学部3年時にゼキ先生の著書を読んでピンと来てしまった私は、ロンドン大学への進学を決め、好きでも得意でもなかった英語を必死で勉強し、バイトを詰め込んで資金を貯め、どうにかマスターコースへの入学を決めました。それでもまだ、この先生のもとで研究ができると決まったわけではありません。指導教官になってくれるよう、お願いしに行きたくても行かなければならないのです。

渡英して無事にコースに入学した私は、まず、先生のラボにいたポスドクの日本人に連絡をとって話を聞きました（後から聞くと、この方がいろいろと取り計らってくれたようで、ほんとうに感謝してもしきれません）。その情報をもとに、教授にメールでアポを取りました。「来週ラボに面談に来られますか?」。返事が来たときにはびっくりするとともに、一気に緊張が高まるのを感じ

ました。ロンドンにすでに3か月ほど滞在していたとはいえ、まだ英語もつたなく、日々の生活で精いっぱい私が、いっときの興味だけでいきなり知らない研究分野に飛び込んで（しかも理転）、やっていけるのだろうか、迷惑をかけるんじゃないだろうか、そんなネガティブな気持ちが渦巻いているのを感じていました。しかし、就活の「し」の字も知らないままここまで来てしまった私に、もう退路はありません。腹をくって教授との面談に行きました。

憧れの先生に初めて会ったときの、あの目はいまだに忘れられません。動物の電気生理研究で高名な先生は、私を見て、それこそまるで動物がとても興味深いなにかを見つけて、それをまじまじと眺めるときのよう、小さな丸い瞳を優しくこちらに向けていたのです。私はたどたどしい英語で、なんとか先生の質問に答えていきました。「どうしてロンドンに来たの?」という質問に困ってしまった私が、数秒の沈黙ののちに“Because of you.”と答えると、先生や同席していたラボメンバーたちは大声で笑いました。「ラボメンバーとして歓迎します」というメールが来たのは、その数日後のことでした。これが、生まれて初めて「夢がなかった」瞬間でした。

それから、私はこのラボで修士の学位を取得し、その後、また別の国

に住処を移して研究を続けることになります。学部卒業の直後という、まだ身分も収入も不安定な時期に海外で暮らすことは、不安も大きく、リスクや危険も伴い、必ずしも良いことばかりではありません。30代半ばとなった私はいまでも、当時の貸与型奨学金の返済に苦しんでいます。それでも、たった5年間という短い期間でしたが、20代の多感な時期に欧州で暮らす経験ができたことは、研究者としても人間としても、何事にも代えがたい価値があったと感じます。

どこにも伝手がないうまま渡英したことにはじまり、いま思い返すと、私は無鉄砲なことばかりしていました。こんな私でもどうにかしたのは、「ロンドンでないと自分のしたい研究ができない」という、そこにはいなければならない明確な理由があったからだと思います。留学は、「アカデミアの道に進むから」という理由だけで、誰しにもお勧めできるものではありません。しかし、慣れ親しんだ煮物の味や、夜中のコンビニにシュークリームを買いに行ける便利さを捨ててでも、そこに行きたい理由や、行かないとかなえられない夢があるのならば、その強い気持ちだけでどんな困難も乗り越えていけるのではないのでしょうか。

教え導く者から、 立ち会える者への変化

北海道旭川聾学校 教諭
前川麻依子

A ちゃんが風邪でお休みしていた日のことです。同じクラスのB君と廊下を歩いていると、突然「せんせい、Aちゃんってやさしいの?」と尋ねられました。それまで自分の気持ちを学校で積極的に表現することが少なかったB君からの突然の問いかけに、よい返事が思いつかず「B君はどう思う?」と尋ね返しました。すると「ぼく、Aちゃんはやさしいなあっておもうんだ」と真剣な表情で前を向いて答えました。私はB君の心根を表すようなまっすぐなまなざしに感動し、すかさず「先生もそう思うよ。Aちゃんってやさしいよね」と言いました。するとB君は私の顔を見てにっこりと笑い、「おんなじだね」と言いました。

初任で聾学校の教員になってから、そのほとんどの時間を聴覚障害がある子どもたちと過ごしてきました。数年小学部に所属した以降は、幼稚部で3歳児から5歳児までの子どもたちと日々楽しくにぎやかに過ごしています。聾学校に通う子どもたちの多くは、先天的に聴覚障害があり、乳幼児期からの言葉の発達が遅れ、自分の考えや気持ちを言い表すことに難しさを抱えやすくなります。そのため、聾学校

幼稚部では、幼い子どもたちやそのご家族に専門的な支援を細やかに行います。聴覚障害のある子どもたちに人と伝え合い、わかり合う喜びを感じてほしいという願いのもと、幼稚部での勤務を続けてきました。幼稚部を担当したばかりの頃の私はうまくいかないことが多く、子どもたちとの関わりに悩み、大学院での学び直しを決めました。心理学に出会ったのはその頃です。

子どもの思いに沿ったコミュニケーションを通じて言葉や心の育ちを促すため、関係発達の視点¹から考えるようになりました。子どもとの関わりをエピソード記述から見直し始めると、それまで見えていたものが、違う様相で見え始めました。それまでは、教え導く対象として子どもを見るあまり、関わりに教師側の指導意図が強く働き、一方向的な関係になりがちでした。そこには、「子どもに力を」という意識が働き、主体を教師である自分に置いた心の動きがありました。そのため、子どもの思いを受け止めようとしながらも、子どもからの発信に気づけず、わかったつもりになり、結果、その思いに沿わない関わりをしていたと思います。

教師としての自分の在り方に葛藤を

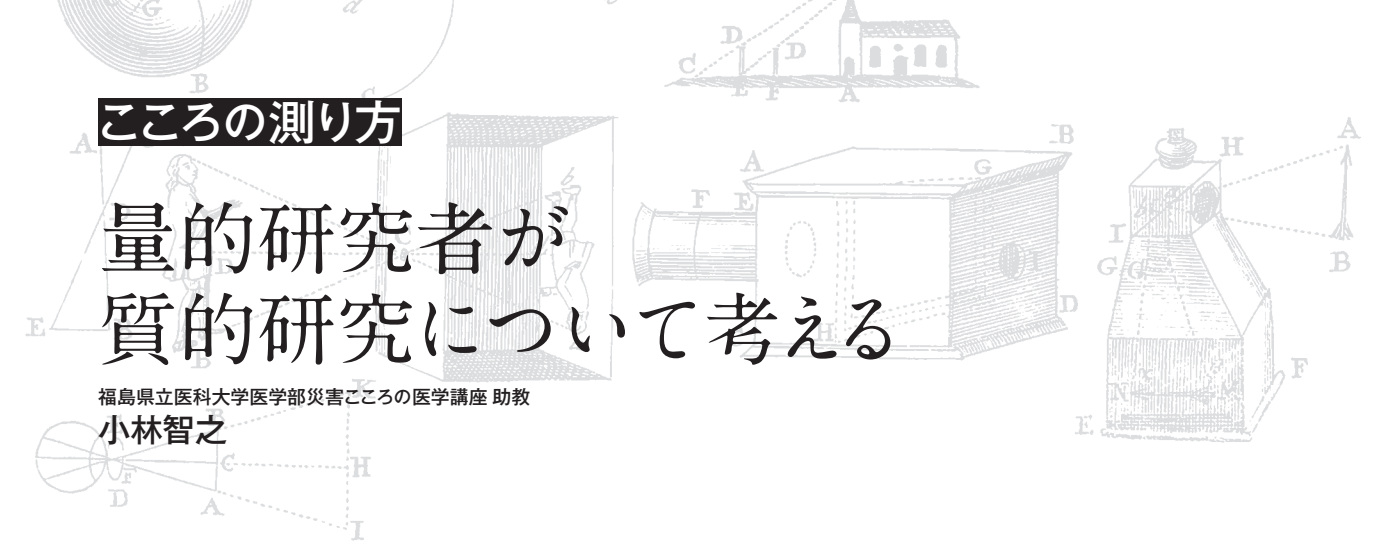


抱え、関係発達に関する書籍を読むうちに、子どもを何者かにしようとするのではなく、今日の前にいる子どもをそのまま受け止めようとする方が、そのうれしい成長が促せると思うようになり、実践に生かすようにしました。それは教師としての正義感や使命感を傍らに置き、視線を子どもに合わせるような作業だったと思います。子どもの多様な姿を受け止めながら、時と場を共にするうち、ある時その子の内にある芽が大きく伸び、思いもよらなかった色の花が開く瞬間に立ち会えるのです。B君がどうしてAちゃんをやさしいと思ったのか、その詳しい理由はわかりませんが、普段学校で自分の気持ちを口にするのが少なかったB君が、その心の内を真剣なまなざしで私に伝え、さらに共感を求めた姿に、私は成長の芽生えを見ました。

もし立ち会えなかったとしても、それはそれでいいのでしょうか。その瞬間に偶然いられることがあるということが、この仕事をする上で最高の幸せだと思えるようになりました。今後もたくさん子どもと出会い、迷い、悩みながら心理学とともにまなざしの在り方を模索し、成長の芽生えに立ち会える瞬間を楽しみにしていきたいと思います。

まえかわ・まいこ 2003年より教職に就く。2015年、北海道教育大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻専門職学位課程修了。専門は特別支援教育。

¹ 鯨岡峻(2006)ひとがひとをわかるということ: 間主観性と相互主体性。ミネルヴァ書房



こころの測り方

量的研究者が 質的研究について考える

福島県立医科大学医学部災害こころの医学講座 助教

小林智之

量的研究者へ

心理学研究を真摯につき詰めれば、量的研究者も質的研究を避けることはできません。

アメリカ心理学会のPublication Manual第7版の改訂では、質的研究や混合研究法が独立したセクションとして扱われ、国内でも日本質的心理学会が設立されるなど、学術的にもその意義は見直されています。

しかし、依然として量的研究者の間で「質的研究は科学的ではない」という考えや「テキストマイニングや自然言語処理などの技法が質的研究を科学的にする」という誤解が根深く、十分な理解が広がっていない現状にあります。

量的研究者向け質的研究法の

手引き

質的研究は、質的データ（インタビュー、自由記述、映像など）と質的分析法（グラウンデッド・セオリー、SCAT、TEMなど）から成り、「社会現象のしぜんな状態をできるだけこわさないようにして、その意味を理解し説明しようとする」とを目的としています¹。この「社会現象のしぜんな状態をできるだけこわさない」という志向性が重要なポイントで、質的研究では、量的研究のように既存の理論や仮説から演繹

的に新たな理論を導出するのではなく、あくまで社会現象を基礎として、生のデータから理論や仮説を形成することを目指します²。そのため、質的研究の知見は、現実場面を基盤としたボトムアップなアプローチであると言えます。

冒頭で量的研究者が質的研究を避けることができないと述べたのは、研究知見の妥当性を問う場合、量的にせよ質的にせよ、たいがいプラグマティックな活用に帰着するためです³。量的研究は、ポピュレーションの普遍的な法則を見いだすことを目指します。しかし、そのために研究知見からは具体的な文脈が失われやすく、量的研究者はしばしば自らの知見の生態学的妥当性や具体性を示すことに苦労します。実践的な応用を考えるのに情報として不足を感じたことがある人も多いでしょう。一方で、質的研究の知見は、当事者の語りや経験に根ざしたものとなるため、現実の文脈と高い互換性を持ち、実践的な応用がしやすいという利点があります。研究者は、研究知見の一般化が可能な広さを追求することも重要ですが、その知見をどのように現場に落とし込んでいけばよいのかという深さを求めることも重要です。それはよい理論を構築することということでもあります⁴。知見の

広さの妥当性を示すのが得意な量的研究と、知見の深さの妥当性を示すのが得意な質的研究をうまく組み合わせられれば、その研究知見はより実用的なよい理論につながることでしょう。

質的研究の具体的な方法について知りたい場合は、専門書を読むか、質的心理学研究の専門家に指導を仰ぐことを推奨します。量的研究とは研究法の考え方が根本的に異なるところがあり、たとえばデータの発生メカニズムとして、量的研究が統計学を背景とするのに対して、質的研究では言語学に根ざした考え方をします。言語データの発生は、簡単に言えば、発話者の内部からではなく、他者との相互作用の中で起こるとされ、これは、研究者の存在を黒衣のようにしてきた量的研究者からするとなじみにくい考え方です。質的研究で代表的なインタビュー法では、参加者と研究者の間でデータが生成されるのであり、分析では質問の仕方だけでなく、誰がどのような文脈で聞いたのかも重要な分析材料となります⁵。そのため、質的研究では、研究者の存在は明示的で、論文の中で研究者の属性や参加者との関係などについて報告することが求められます⁶。

また、質的研究の論文が量的研究

と異なるのは、ひとつの分析の中で、複数の研究者が登場したり、複数の情報源によるデータが報告されたりすることでしょう。これは、トライアングレーションと呼ばれ、質的研究における研究の信用性を高める手法のひとつです¹。

他にも、サンプルサイズは量的研究と比べてかなり小さく、私が日本質的心理学会の学会誌『質的心理学研究』を見たところ、インタビュー調査の過半数が1~4人を参加者としていました。これは、量的研究と質的研究のサンプリングの考え方の違いによるものです。量的研究ではポピュレーションの重心にある法則を見いだすことを意識したサンプリング法（たとえばランダムサンプリング）が好んで使われますが、質的研究では、社会現象から意味を見いだすことを重視して、なるべく情報量の豊かなデータが得られるようにサンプリングが行われます。そのため、ひとことしか回答してくれない100人よりも、3時間熱心に話してくれる1人のほうが研究の質が担保されているとされます。あるいは、参加者の人数よりも、インタビューの1人あたりの回数や時間のほうが重要とされます。これは、回数や時間が積み重なるほど、研究者と回答者の間でラポールが形成され、より豊かな情報が得られやすくなるためです。とくに、参加者の人生に深く関わる内容などは、何度も交流をする中でようやく話してくれることもめずらしくありません。

混合研究法について：量的研究と質的研究の思慮深い統合

特定の研究知見について量的研究

と質的研究によって広さと深さの理解を得ることができれば、実用的なよい理論の構築につながるでしょう。しかし、量的研究と質的研究はアプローチの方法が異なるため、それらの知見の統合には慎重さが求められます。

たとえば、質的研究は仮説検証型の研究デザインにすることができません。質的研究では、特定の社会現象を参与観察やインタビューによって切り取って、そこに最も説得力をもった仮説を形成するアブダクションの方法をとります。しかし、仮説があらかじめ用意されていると、参与観察やインタビューのデータを見て「仮説が支持された」と推察することになり、循環論法の構造になってしまいます。そのため、ひとつの仮説を量的研究と質的研究で検証したという組み合わせはできないのです。

また、たいがい量的研究の知見は質的研究の知見よりも抽象度が高いため、知見の安易な統合は量的研究の知見の解釈に引っ張られる可能性があります。すなわち、抽象的知見は柔軟で幅広い解釈ができてしまうため、具体的な知見が一致しているように見えやすいです。量的研究と質的研究からそれぞれ得られた知見が同じことを言っているように思えても、その抽象度が違えば質的研究の知見の過度な一般化を起こしている可能性があります。

さらに、尺度開発などでよくみられる質的研究で項目を集めた後に量的研究を行うデザインにおいても注意が必要です。質的研究では仮説形成が行われますが、たいがい文脈の特殊性が含まれているため、その仮

説をそのまま量的研究で検証しても「＝ポピュレーションの知見」と結論づけることは難しいでしょう。量的研究の知見は帰納推論であるため、そもそも一般化に対して脆弱性をもっており、質的研究の知見の過度な一般化を緩和する仕組みは、量的研究の調査や分析の手続きの中にはありません。

量的研究と質的研究の統合はシークエンスに行うのではなく、独立した研究プロセスのもとで量的研究と質的研究を行ったうえで、得られた知見の抽象度をそろえ、ひとつに統合するようにする必要があります。知見の抽象度をそろえる方法として、質的研究の知見を抽象化することがありえるでしょう。質的研究の知見の抽象化には、言語データから知見や理論を形成するさまざまな手法が議論されています^{2,7}。

以上、私自身も量的研究者の立場から、量的研究者に向けた質的研究のメリットや活用の可能性について考察しました。量的研究と質的研究の統合が広さと深さの妥当性をもったよい理論を生み出すかもしれません。心理学の発展への貢献として、本稿が、新しい可能性について考える一助になることを願います。



こばやし・ともゆき

同志社大学大学院心理学研究科心理学専攻博士後期課程修了。博士（心理学）。2025年より関西学院大学社会学部准教授。専門は社会心理学。著書に『睡眠学の百科事典』（分担執筆、丸善出版）、『Health Effects of the Fukushima Nuclear Disaster』（分担執筆、Elsevier）など。

1 メリアム, S. B. / 堀薫夫他訳 (2004) 質的調査法入門: 教育における調査法とケース・スタディ. ミネルヴァ書房 2 シャーマズ, K. / 岡部大祐監訳 (2020) グラウンデッド・セオリーの構築 (第2版). オカニシヤ出版 3 リースマン, C. K. / 大久保功子・宮坂道夫監訳 (2014) 人間科学のためのナラティブ研究法. クオリティケア 4 レヴィン, K. / 猪股佐登留訳 (2017) 社会科学における場の理論. ちとせプレス 5 やまだようこ (2024) ナラティブ研究: 語りの共同生成. 新曜社 6 American Psychological Association (2020) Publication manual of the American Psychological Association, 7th ed. APA. 7 やまだようこ (2007) 質的心理学研究, 6, 174-194.

いじめの心理学

高
校
生
に
伝
え
たい

Psychology for U-18

神戸女子大学心理学部 教授／奈良女子大学名誉教授

伊藤美奈子



いとう・みなこ

専門は臨床心理学。著書に『不登校の理解と支援のためのハンドブック：多様な学びの場を保障するために』（編著、ミネルヴァ書房）、『「学校」ってなんだ?: 不登校について知る本』（監修、Gakken）など。

はじめに

これまでの学校生活において「悪口を言われた」「ものを隠された」「ネットで嫌な書き込みをされた」など、いじめを経験した人は少なくないと思います。いじめ防止対策推進法（2013年施行）は、いじめ被害者の救済を第一に考えて作られた法律であり、いじめは加害側の理屈ではなく、被害側の主観（つらかった・嫌だったなど）をもとに定義されています。

このいじめへの指導について、上記の法では「毅然と指導する」ことが重視されました。もちろん、ストレス解消のための弱い者いじめなどに対しては、加害側の規範意識の歪みを修正し、再発防止のためにも「毅然とした指導」が重要であるといえます。他方、学校現場では、必ずしも「加害者＝強者、被害者＝弱者」とはいえないケースもあります。たとえば、いじめをしている子どもが以前はいじめられる側であったり、あるいは家庭では虐待の被害者であったりという複雑な事情を抱えるケースです（だからといって、それらがいじめを許容する理由にならないことは変わりません）。

そこで、本稿では、調査結果¹をもとにいじめの背景に潜む心理学的な問題に迫ってみたいと思います。高校生読者に理解してもらいやすいよう、分析方法はシンプルなものに限っています。

いじめに関する調査の方法

まず、いじめをめぐる子どもたちの心理について論じてみたいと思います。以下のデータは、筆者が2017年に発表したデータを二次分析したものです。対象者は、小学生3,720人、中学生3,302人、高校生2,146人。調査内容は、いじめの8分類¹について、被害は三択（今ある・過去にあった・ない）、加害は二択（あった・ない）で回答を求めました。それ以外に、いじめ被害を受けた時の気持ち（図2参照）や自己肯定感、いじめ被害を受けた時の相談の有無とその理由について尋ねました。

いじめ被害・加害経験の有無

まず、図1は加害経験の有無で二分し、それぞれの群の中での被害経験の3群をクロス集計した結果です。全体に見ると、いじめをしたことがある子どもたちのほうが多く、いじめをした子どもたちの約8割は「いじめられた経験」を有しているといえます。一方、いじめをしたことがない子どものうち約半数は被害経験もありません。これより、いじめ加害と被害が決して無関係ではないことがわかります。

いじめられた時の反応

次に、いじめを受けた時の気持ちについての結果を見てみましょう。図2によると、「学校に行きたくない」と不

登校気分に陥った子どもたちが3割弱、「死にたいくらいつらい」と回答した子どもが1割弱を占めました。いじめにより不登校という重大事態になりかねないケースは決して稀ではないといえます。一方「眠れなくなった」「体調不良になった」というように身体不調につながったケースは数%でした。その半面で「いつかやり返そうと思った」と、仕返しを考えた子どもが5人に1人いることがわかります。一番多かったのは「我慢しようと思った」で、3人に1人がいじめを我慢してしまう現状が浮き彫りになりました。本来、いじめられたほうが我慢して終わりにするべきではなく、限界を超えて我慢することで重大事態になってしまう状況は避けねばなりません。

いじめと自己肯定感

では、いじめを受けた子どもたちといじめたことがある子どもたちの自己肯定感はどうなっているのでしょうか。小・中・高校生込みで加害経験2水準（あった・ない）と被害経験3水準（ある・あった・ない）で6群に分け、それぞれの群ごとに自己肯定感の合計得点の平均を図3に示しました（自己肯定感得点のレンジは1～4点）。ここでいう自己肯定感とは、「自分に満足している」「自分のことを理解してくれる人がある」「自分のことは自分で決められる」などの22項目からなる、やや広義の自己肯定感をとらえる東京

図1 いじめ加害と被害のクロス集計

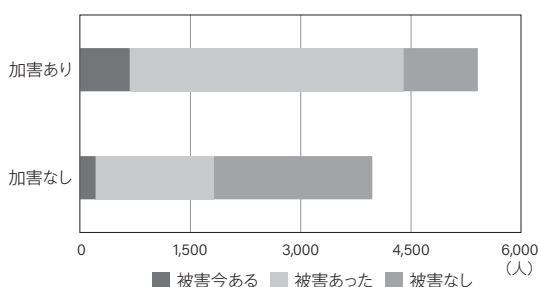


図2 いじめを受けた時の気持ち

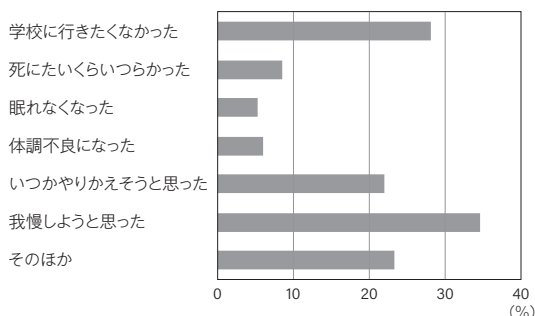


図3 加害・被害6群の自己肯定感

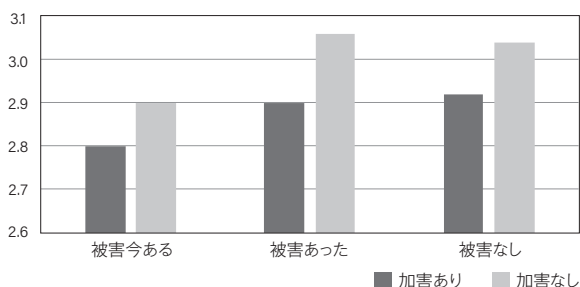
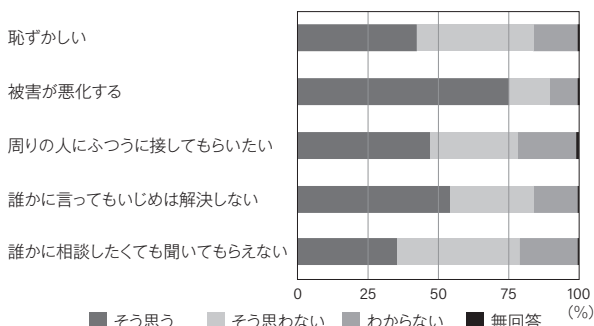


図4 いじめを相談しない理由



都版自尊感情尺度¹を使用しています。

被害の状況で見ると、今いじめを受けている子どもたちの自己肯定感の低さは明確ですが(2要因の分散分析の結果、被害の主効果は有意)、被害が「あった」と過去のことになっている群の自己肯定感は、被害がない群とそれほど大差がないことがわかります。いじめ被害がPTSDのように長く影響する場合もある一方で、さまざまな支援を受け、そこから立ち直れる子どもたちもいるとわかります。

一方、被害の3水準別に、加害の有無で比べると、いずれにおいてもいじめたことのあるほうが自己肯定感低いことが浮き彫りになりました。6群で一番低かったのは、「いじめた経験があり、今いじめを受けている子ども」でした。いじめる側からいじめられる側への「転落」は一番ダメージが大きいのかもしれません。

いじめ被害の相談

では、こうしたいじめを受けた子どもたちは、周りの人に相談をしているのでしょうか。相談経験の有無を校種別に比較すると、小学生では相談する子どもが半数を超えているのに、中・高校生では6割の子どもが相談しなかったと回答していました。ではなぜ、いじめを相談しないのでしょうか？ それを調べたのが図4です。被害側の7割が「被害が悪化する」を相談しない理由に選び、「誰かに言ってもいじめは解決しない」とあきらめを感じている子どもも半数を超えました。また「周りの人にふつうに接してもらいたい」という回答も4割を超えています。この結果より、同情や腫れものに触るような扱いをされたくないという微妙な心理を尊重しつつサポートすることが求められるとわかります。また「いじめられる＝恥ずかしい」という認識も強いことがうかがえます

し、相談したい時にきちんと向き合って聴いてくれる大人がいないと感じている子どもも少なからずです。他方、教育臨床の現場では、「親に心配をかけたくない」「親を悲しませたくない」「親に騒がれるのは困る」という思いから打ち明けられない子どももいます。いじめについてのSOSは、非常に勇気があることなのでしょう。

以上のように、調査結果からいじめの諸相が見えてきました。読者の皆さんの身の回りで見られているいじめについて、またいじめを巡る自身の心の動きについて、エビデンスを通して考えてみてください。

Book Guide ブックガイド

『いじめ:教室の病い』森田洋司・清永賢二(著)、金子書房、1994年

いじめについて、調査データを紹介しつつまとめられている。刊行から30年以上経っても読み継がれる高著。

1 伊藤美奈子(2017)教育心理学研究,65,26-36.

誰か1人が皆のために 動かなければいけないとき

神戸大学大学院人文学研究科 助教
ターン有加里ジェシカ



たーん・ゆかりじぇしか 東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程（社会文化研究専攻）修了。博士（社会心理学）。専門は社会心理学。2022年、日本学術振興会第12回育志賞受賞。2023年より現職。

誰か1人が皆のために動かなければいけない。こういった状況は、日常のさまざまな場面でみられる。例えば、家庭や職場で共有スペースが汚れたとき、誰かが掃除しなければいけない。また、新たなコミュニティを立ち上げる際には、誰かがその代表者になる必要がある。このように、集団内で少なくとも1人が負担を引き受ければ集団全体が利益を得られるような状況は、「ボランティアのジレンマ¹」とよばれる。ボランティアのジレンマは、社会的ジレンマという集団状況の一種として、社会科学の諸分野で研究されてきた。

ボランティアのジレンマにおける 効率と公平の対立

ボランティアのジレンマ状況が繰り返し発生するとき、誰がどのくらいの頻度で負担を引き受けるべきだろうか。集団成員ごとに負担の大きさが違うとき、この問いに対する答えは複数存在しうる。

ここで、図1のような簡略化したボランティアのジレンマ状況を考える。この状況では、3人のうち最低1人がレバーを引けば、全員が80コインずつ受け取れる。ただしレバーを引くには負担が伴う。Aさんがレバーを引く場合は30コイン、BさんとCさんがレバーを引く場合は50コインが必要である。

この状況で望ましいとされうる分担には少なくとも2種類考えられる。一方は、効率（集団全体の総負担を最小にすること）を優先した分担である。最も効率的な分担は、負担が最も小さく済むAさんだけがレバーを引き続けることで実現する。もう一方は、公平（各集団成員の負担を均一にすること）を優先した分担である。公平な分担をするためには、AさんだけでなくBさんとCさんもある程度レバーを引く必要がある。

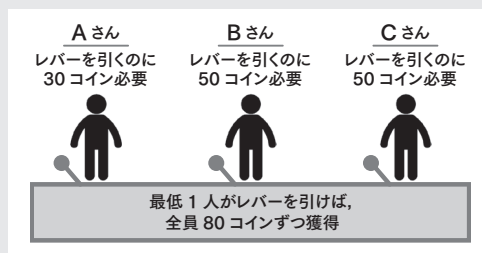
効率を優先すれば公平は損なわれ、逆に公平を優先すれば効率が損なわれる。このように効率と公平が対立

するため、私は博士論文研究の中で図1のような状況を用いた実験を行った²。実験参加者を3人組にし、レバーを引くか否かという選択を繰り返し行ってもらったのである。その結果、参加者は公平を優先すべきと考えているが、実際には公平な分担からしばしば乖離することが示された。さらに、その乖離の主な要因は、誰がいつレバーを引くかに関して成員間で調整しきれなかったためであることも示された。

図1の状況で公平な分担を実現するためには、AさんはBさんとCさんよりもやや頻繁にレバーを引く必要がある。つまり、「Aさん→Bさん→Cさん……」といった単純な交代制では公平な分担には至らない。そこで、誰がいつレバーを引くかに関して成員間で調整する必要があったが、その調整が難しかったのである。

現実場面を考えてみても、公平な分担が理想とされているのに、成員間の調整が難しいために理想通りにならないことは多々ある。また、本実験の状況ではどのような分担が公平であるかに関して一意的に定まりやすかったが、実社会ではそもそも何が公平かについて合意がとれないこともある。今後はこういった社会的状況に関する検討をていねいに進めながら、理論的・社会的に貢献できるような研究に励み続けたい。

図1 ボランティアのジレンマ状況



するとき、どちらの分担原則が理想とされるのだろうか。また、その理想とされる原則通りの分担は行われるのだろうか。

理想的な分担と 実際の分担の乖離

上記の問いを検討す

1 Diekmann, A. (1985) *J Conflict Resolut*, 29, 605–610. 2 Tham, Y. J. et al. (査読中) Equitable burden-sharing in “take-one-for-the-team” situations: The role of coordination.

「ヒューマンエラー」から安全を考える

公益財団法人大原記念労働科学研究所研究部 研究員

西村春輝



にしむら・はるき 筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程修了、博士（心理学）。2021年より現職。専門は臨床心理学、産業組織心理学。筆頭論文に *Current Psychology*, 41(5), 2896-2907, 2022 など。

私たちは日常生活やニュース、そして心理学の研究の中で「ヒューマンエラー」という言葉をよく耳にします。仕事上のちょっとしたミス、交通事故、医療事故、航空機のトラブルなど、さまざまな場面で「ヒューマンエラーが原因だった」と言われることがあります。たとえば、幼稚園や保育園の送迎バスに園児が取り残され、熱中症で亡くなってしまったという痛ましい事故が数年前に相次ぎました。この事故では、スタッフによる「思い込み」「確認不足」といった「ヒューマンエラー」が問題視されました。では、「確認不足」のような「ヒューマンエラー」を原因とみなすことは将来の事故の再発防止に役に立つのでしょうか。

シドニー・デッカーによると、「ヒューマンエラー」という表現はしばしば後知恵 (hindsight) として用いられています¹。普段、それなりの確認方法で問題なく運用されていれば、その確認は「ヒューマンエラー」とは呼ばれません。しかし、ひとたび事故が起きると、後から得られた情報と照らし合わせて、その時の行動が正しかったかどうかの評価が第三者によって行われます。照合の結果、あるべき姿と比較して不十分な点が見つかると「ヒューマンエラーが原因で事故が起きた」と論じられることとなります。

私は、仕事上、企業や公的機関の事故報告書を読む機会がありますが、「不注意」「確認不足」「意識の欠如」といった「ヒューマンエラー」が原因として挙げられることは少なくありません。より専門的な表現として「不安全行動」や「危険感受性」などが代わりに用いられることもあります。このような原因論から導かれる典型的な再発防止策は、「確認の徹底」「ルールの遵守」のような精神論になりがちです。

推測ですが、園のスタッフは、ふつうに確認をしていたと思われます。たとえば、車内の隅々まで確認せずとも、運転席側から座席全体をざっと目視する、降りてきた園児の数を数えるといった方法でも通常は問題ないと思います。さらに、バスから園児は勝手に降りるでしょうから、降りるところを見ていれば、それで確認したとも言えるでしょう。これを「ずさんな管理体制」と後から指摘することは容易ですが、このような後知恵的な解釈では、事故がなぜ起こったのかを説明できません。事故の原因を理解するために最も重要なのは、当事者が何故そのような行動をとったのか、当事者の立場になって理解することです。

私の所属する研究所の大先輩である狩野広之氏は1959年の『不注意物語』という著書の中で「不注意

は原因ではなく、むしろ結果」であり、「不注意の発生する条件」を研究するべきと指摘しています²。また、近年ではデッカーをはじめとするヒューマンファクターズの専門家は、「ヒューマンエラー」を原因ではなくシステムの一部とみなし、事故がなぜ起きたのかを問うことは、よりよい組織を作るための学習の機会ととらえることができると考えています¹。

「ヒューマンエラー」を原因とみなし「ヒューマンエラー」を防ぐことばかりに注力してしまうと、より上流にある社会文化的背景、組織の仕組みや文化、管理の方法、仕事のやり方を問うことができなくなり、本来の目的である事故防止から視点が逸れてしまいます。一方で、より上流の問題も含めて事故をシステムとして理解していくことで、将来の事故を減らすことができるかもしれません。「ヒューマンエラー」をどのように理解し、付き合っていくかを考えるのが今の私の研究テーマのひとつです。

1 デッカー、S./小松原明哲・十亀洋監訳 (2010) ヒューマンエラーを理解する:実務者のためのフィールドガイド:海文堂出版 2 狩野広之 (1959) 不注意物語:労働災害の事例研究集:労働科学研究所

認定心理士の会から

テーマに込めた想い

皆さまは認定心理士の会のイベントについてどのように感じておられるでしょうか。運営委員として新参者ではありますが、関東支部としてテーマを考える際に私なりに意識していることがあります。それは、多くの人が注目をするテーマのみならず、あまり注目はされないけれど、そのことで悩んでいた、困り感を抱えている人がいるであろうテーマにフォーカスを当てるといことです。もちろん一人でも多くの方に参加していただきたいという気持ちはありますので、最新のテーマであったり、注目度の高いテーマを取り上げることは大切だと考えています。それと同時に、そういったことは気にせずに、困り感を抱えている人の気持ちと和らいだり、当事者のみならず関わっている人たちが救われるようなテーマを取り上げることに意味があると感じています。心理学に関わるものとしては、ある意味当然のことかもしれませんが、あらためてその重要性を感じていますし、そのようなテーマを支部の先生方と考えることはとても楽しい時間です。

認定心理士の会で企画されているイベントには、それぞれの支部の先生方のさまざまな想いが込められています。そういった視点で、認定心理士の会のイベントにどんなテーマが取り上げられているのかを見ていただくと、興味が出てくることもあるかもしれません。今後も、さまざまなテーマでイベントが実施されていくことになりますが、ご自身にピンポイントのテーマのみならず、企画に込められた想いを想像していただきながら、いろいろなテーマの企画にご参加いただけるとうれしく思います。きっとよい学びの機会になるものと信じています。

(認定心理士の会運営委員会委員 本田周二)

若手の会から

現実はいつも「若手の」対話から生まれる

——わたしは心って、もっとホリスティックなものだと思うの。言葉でなんて表現しきれない、全体的で、直観的なものでしょ？

——いやいや、それじゃあなにも説明できてないよ。俺は心はもっとう、システムティックに説明できると思うんだ。

——はあ、わたしたちって、わかり合えないわね。

タイトルは、心理学に社会構成主義を取り込んだガーゲンの著書『現実はいつも対話から生まれる：社会構成主義入門』からのオマージュです。わたしたちは日々、他者と対話しながら生きています。雑談でもなく議論でもなく、そこで敢えて対話を選択するのは、両者が、両者なりの正しい“真実”を表そうとしているからでしょう。分断が多い世の中ですが、対話を経てうまくいけば、それぞれの真実は“わたしたちの真実”にめでたく昇華されます。しかし、これがなかなかうまくいかない。冒頭のように、両者はプライドを持って自分の信念をぶつけているわけで、そうそう簡単に折れたりはいしません。もしくは、既存の権威関係や同調圧力などで、そもそも相手にぶつけることすらできていないのかもしれない。

そんな現実を打破するためにオススメできるのが、わたしたち若手です。若手なので、まだまだ己の“真実”の牙城は脆く、ナラティブ変容の余地があります。また、幸か不幸かそれほど業績もなければ有名でもなく、ゆえに、若手同士は皆フラットな関係です。対等な立場で正直な対話を通して、学問として、あるいは研究環境としての心理学のリフレーミングに貢献できることと信じています。冒頭のやり取りには、実は、続きがありました。

——わたしたちって、わかり合えないわね。でも、すごく楽しい。“わたしたち”が納得できる、新しい真実を一緒に見つけていきましょう。

(若手の会幹事 阪口幸駿)

常務理事会から

日本心理学会の学術雑誌発行に関する変更点

ご存じのように、現在日本心理学会では2種の学術誌、邦文誌「心理学研究」ならびに英文誌 Japanese Psychological Research (以下、JPR) を刊行しています。2誌の歴史は古く、心理学研究は1926年創刊、現在までに5,303本の論文を収録、JPRは1954年創刊で収録本数は1,969本です(2025年1月12日現在)。いずれも日本の心理学界の研究を支える屋台骨となる存在と自負しております。

これら2誌の刊行について、いくつか変更することとなりました。まず両誌とも2026年から完全電子化といたします。心理学研究は2026年4月発行の第97巻より、JPRは2026年1月刊行の第68巻より完全電子化となります。会員の皆様へはメイリングリスト等で新しい巻号の発行情報をお届けして自由にお読みいただけるようにし、紙媒体への印刷・郵送は廃止いたします。

この変更の主たる理由は、社会・生活の奥深くまで進展した情報化と、カーボンニュートラル等によりSDGsへの学会として果たしたい責任です。多くの会員から「経費節約のために電子化を」とご提案をいただいておりますが、実際には(残念ながら)その点では大きな効果は得られませんでした。なお図書館等で「今後も紙媒体での刊行物がほしい」という強いご要望がある場合、別途ご相談の機会を持たせていただきます。

完全電子化に踏み切るのに少し時間がかかった理由は、「学術雑誌としての情報を確実かつ永続的に保存できるか」という懸念でした。冊子体の雑誌は国立国会図書館に1冊寄贈をする義務があり、「確実に」1冊は残していくことができます。電子発行のみとなった場合について、紆余曲折がありましたが、現在国立国会図書館のデジタル資料長期保存システムに全記録を残していただくよ

う手続き中です。こちらでも会員の皆様に情報をいただき、ありがとうございました。これを機に国立国会図書館のデジタルコレクションにもご興味を持っていただけますと嬉しいです。

もう一点、今後JPR誌では会員以外の一部投稿者から雑誌掲載料をいただくこととなりました。会員の皆様にはこれまで同様に無料で論文発表の場としてご利用いただけます。この変更はJPR誌への投稿数が急増したことを契機としております。総投稿数では2022年度以後、JPR誌が心理学研究誌を追い越しました。この背景には、世界で雑誌電子情報化とオープンアクセスが広まり、同時に一部雑誌の掲載料が大きく値上がりしたことがあります。その結果、「無料掲載」のJPR誌は世界中の様々な国からの様々な論文の投稿先となりました。これは学会として喜ぶべき現象です、が一方で、これは心理学の研究かしら? この成果を「日本心理学会から」刊行する価値は何かしら?と思われるケースも出てきました。学術誌発行のためには、多くの会員の皆様に査読等でお力をお借りします。そうしたお願いをするのが申し訳なくなるような投稿には一定の歯止めをかけたい、そのため「投稿・掲載には責任を伴う」ことを意識していただく目的で、掲載料を課すこととなった次第です。繰返しになりますが、会員の皆様にとっては変わらず、「学会費を通じて、無料で論文を出せる」媒体です。奮ってご投稿ください。

心理学ワールド誌、アンケート始めました!

心理学ワールド誌で「読者の皆様からご意見を伺う」アンケートを始めました。記事へのコメント等の他、「このコラムにぴったりの人がいますよ」といった情報を寄せていただき、皆様と共に創る雑誌を目指します。ご回答、お待ちしております。

(編集担当常務理事/筑波大学名誉教授 原田悦子)

資格認定委員会から

1 認定心理士について

2024年10月12日に開催された2024年度第3回（通算第201回）の認定心理士資格認定委員会では、①9月17日までに受け付けた申請のうち651件を審査し、591件を合格、53件を保留、7件を不合格としました。②また、前回までに保留または不合格と判断されていた者のうち、追加資料が送られてきた32件について再審査を行い、うち26件を合格、3件を保留、3件を不合格としました。③10月11日までに大学等からの問合せが28件あり、審査を行いました。

12月7日に開催された第4回（通算第202回）の認定心理士資格認定委員会では、①資格申請について11月8日までに受け付けた申請のうち610件を審査し、578件を合格、29件を保留、3件を不合格としました。②前回までに保留または不合格と判断された者のうち、追加資料が送られてきた37件について再審査し、35件を合格、2件を不合格としました。③12月6日までに大学等からの問合せが13件あり、審査を行いました。

2024年12月27日時点で、2024年度の初回審査数は2,948件、総審査数は3,113件、認定可の件数は2,882件、資格取得者数は2,372名で、この結果、資格取得者累計は、75,997名となりました。

2 認定心理士（心理調査）（通称：心理調査士）について

2024年度第3回認定心理士資格認定委員会では、認定心理士（心理調査）資格申請について9月17日までに受け付けた者のうち12件を審査し、3件を合格とし、9件を保留としました。また、前回までに保留または不合格と判断された者のうち、追加資料が送られてきた26件について再審査し、23件を合格、3件を保留としました。

第4回の委員会においては、11月8日までに受け付けた者のう

ち3件を審査し、3件を保留としました。前回までに保留または不合格と判断された者のうち、追加資料が送られてきた者6件について再審査し、5件を合格、1件を不合格としました。心理調査の資格取得者累計は、12月27日時点で622名となりました。

3 その他

認定システム検討小委員会では、システムの円滑化の改良の検討とともに、認定基準を議論しました。大学からのカリキュラムの審査も来ておりますが、「心理実習」は見学を主とした授業という形態が公認心理師の法規で決められており、講義科目を主体として認定する趣旨である科目群や、実験演習を主体とする科目（c領域）では、認定科目として基本的にカウントできない種類のものとなっております。ご留意いただけたら幸いです。

幸い今年度、申請件数は昨年度を超えて、徐々に従来の水準に回復しつつあります。大学等の関係者におかれましては、こうした資格のあること、また認定心理士の会に加入するとさまざまなイベント案内のあることなどを、ぜひご周知願えましたら、幸いです。今年の学会大会におきましても新しい企画を用意するよう、目下鋭意検討中です。

（資格担当常務理事／東洋大学教授 北村英哉）

編集後記

本号では、アートについての特集を企画しました。アートといえば、まずは手堅く知覚・認知、あとは感情が発達、まあ最大でも比較心理あたりでしょ、と思われる方も多いかもしれません。今回の特集の裏テーマはいよいよアートは社会心理でも扱われるべきトピックである！というものです。さて、研究にもアートの側面があると言われることがありますよね。ということで、引き続き、みなさん楽しくアートしていきましょう！（森本裕子）

編集委員

編集委員長

片山順一（関西学院大学）

副委員長

松田いづみ（青山学院大学）

委員

牛谷智一（千葉大学）

大北 碧（甲南女子大学）

川島大輔（中京大学）

蔵永 瞳（滋賀大学）

坂田陽子（愛知淑徳大学）

東海林渉（東北学院大学）

野内 類（人間環境大学）

野村和孝（北里大学）

橋本博文（大阪公立大学）

福田実奈（京都外国語大学）

森本裕子（人間環境大学）

担当常務理事

原田悦子（筑波大学／イデアラボ）

